

「畔字義」を読む

長  
澤  
弘  
隆

「畔字義」を読む

# 目次

■まえがき

■「呷字義」 原文・書き下し・私訳・註記・付記

■字相

◆字相の概説

◆字相の各説

◇賀(訶)字

◇阿字

◇汗字

◇麼字

■字義

◆字相の概説

◆字義の各説

◇訶字

◇阿字

◇汗字

◇麼字

■「呷字」の総合釈

◆四字・四身

◆ 個別の相

◆ 共通の相

◆ 字相

◆ 字義

◆ 意義

■ 「卍字」の総括

◆ 擁護

◆ 自在能破

◆ 能満願

◆ 大力

◆ 恐怖

◆ 等観歡喜

■ あとがき

## ■まえがき

「吽 (hūm・) フーム・うん)」は、サスクリット「フム hūm」の「ウ」が変化して長音化し「フーム hūm」になったもので、「フム hūm」の原意はほら貝の音や牛の鳴く声のようななり音(「フーン」「ヴォー」「モー」)のことである。それが悉曇では「ha」と「u」と「m」の三字合成で表記され、「吽字」と言う場合はおよそこの悉曇表記のイメージで言われている。

原語「フーム hūm」は、ウパニシャッドなどのインド古典では「除滅」「調伏」「退散」を祈る密語として、祭詞の祈りなどに見られる。例えば、『チャーンドローグヤ・ウパニシャッド』では、シヴァ神・バイラヴァ(シヴァ神の凶暴な性格)を倒し、不運・不幸・恐怖・苦痛を除去する意味で使われている。また仏教では、各種の真言の末尾に付けられ、例えば「光明真言」(おん あぼぎやべいろしゃのうまかぼたらまにはんどまじんばらはらはりたやうん)や、不動明王など忿怒尊の真言には「フーム・パット hūm phat (うんはった)」で用いられ、「スヴァーハー svāhā (そわか)」「パット phat (はった)」「ブルム bhūm (ぼろん)」などと同様にいわば聖音である。真言の冒頭によく見られる「オーム om (おん)」も「帰依」「稽首礼」を意味する聖音である。

この「フーム hūm」が、漢訳仏典では「吽(うん)」と音訳され、さらに口を開いて声を発する最初の音「阿(あ)」と口を結んだ、すなわち声の最後の「吽(うん)」とが、「あ・うんの呼吸」(師匠と弟子の啐啄同時、相撲の立ち合い)や金剛力士像の「阿形」と「吽形」にもなった。

然るに、宗祖大師はこのような点には論及せず、「吽字・」を「 (詞・カ)」と「 (阿・ア)」と「 (汗・ウー)」と「 ma (麼・マ)」の四字合成とし、それに密教的な深秘釈を加え、総じては顕密二教論、すなわち密教教理の優位性の論証に仕立てている。ただしこの四字、本来「吽字・」は「ha」「u」「m」の三字合成であるが、宗祖大

師は「**ह** ha」のなかに「**ज** (a)」があるとみなし、「**ह** h」と「**ज** a」と「**म** ma」の四字合成としている。さらに悉曇の空点「**ॐ**・**ॐ**」を「**म** ma・**麼**」としている。宗祖大師は「訶字」「阿字」「汗字」「麼字」の四字とその字義である「因」「本不生」「損滅」「吾我」を解説し、さらに詳しく密教の大日如来の不二一如の立場ではその字義も不可得だと説き、それがまたそれぞれの実義（本当の意味）だと結論づける。

時に、サンスクリットアルファベットを悉曇で字母と言ひ、母音を摩多、子音を体文と言ひ、それぞれに一つ字義（意味）がある、例えば、「**ज** a」の字義は「本不生」で、あらゆるもの（一切諸法）は縁起生（因縁所生）であつて無自性・空であるから、それ自体で生滅するものではないという意味であり、そのサンスクリット原語が「**ज**」を冒頭に付けた「**ज**anupāda」（「生じない」）あるいは「**ज**adi-anupāda」（本初不生）である。「**ज**」を頭に付けた語はほかにいくらでもあるのに、「**ज**」の字義がなぜ「anupāda」（不生）なのか、これは『大日経疏』の善無畏・一行の時代には確立していたにちがひなく、私にはその根拠がわからない。「**ह** ha」の字義である「因」も同様で、「因」のサンスクリットは「hetu」である。「**ह**」が頭に付く語は「hari」「hasta」「hina」「hridaya」「homa」などまだいろいろある。「**ह**」も「**म** ma」も同様で、すなわち摩多・体文の字義すべてが、その字義と原語がどうして選ばれたのか、根拠がわからないのである。

しかしともあれ、宗祖大師は当時のサンスクリット語学力や悉曇の実力をフルに發揮し、「**ह**訶」「**ज**阿」「**म**汗」「**म**麼」の四字の意味と密教の実義を展開し、さらには「**吽**字」そのものの総合的な解釈や総括において密教の優位性を説き、最後に「**吽**字」の六義を明かし、「**吽**字」に利他行、すなわち『大日経』の大悲胎藏の慈悲行（菩提心因・大悲爲本・究竟方便）が具有されていると説く。

なお、サンスクリットアルファベット、すなわち悉曇の「摩多」（母音）・「体文」（子音）、総じて「五十字門」は次の通りである。「字門」とは、アルファベット（字母）の字相や字義のことである。

●摩多(母音)及び字義 十六字

○通摩多(十二字)

- ①「**ア**」(本不生) ②「**ア**」(寂靜) ③「**イ**」(根本) ④「**イ**」(去禍) ⑤「**ウ**」(譬喩)
- ⑥「**ウ**」(損滅) ⑦「**エ**」(求) ⑧「**エ**」(自在) ⑨「**オ**」(瀑流)
- ⑩「**ウ**」(變化) ⑪「**ア**」(辺際) ⑫「**ア**」(離)。

○別摩多(四字)

- ⑬「**リ**」(神通) ⑭「**リ**」(類例) ⑮「**リ**」(染) ⑯「**リ**」(沈没)。

●体文(子音)及び字義 三千五百字、ただし「ラム」(都除)は数えないので三十四字。

- ⑰「**カ**」(作業) ⑱「**カ**」(等空) ⑲「**ガ**」(行) ⑳「**ガ**」(一合) ㉑「**ギ**」(支分)
- ㉒「**シ**」(遷変) ㉓「**シ**」(影像) ㉔「**シ**」(生) ㉕「**シ**」(戦敵) ㉖「**シ**」(智)
- ㉗「**タ**」(慢) ㉘「**タ**」(長養) ㉙「**タ**」(怨対) ㉚「**タ**」(執事) ㉛「**タ**」(諍論)
- ㉜「**タ**」(如如) ㉝「**タ**」(住処) ㉞「**タ**」(施与) ㉟「**タ**」(法界) ㊱「**タ**」(名字)
- ㊲「**パ**」(第一義) ㊳「**パ**」(不堅) ㊴「**バ**」(縛) ㊵「**バ**」(有) ㊶「**マ**」(吾我)
- ㊷「**ヤ**」(乘) ㊸「**ラ**」(塵垢) ㊹「**ラ**」(相) ㊺「**ヴァ**」(言説)
- ㊻「**シ**」(本性寂) ㊼「**シ**」(性純) ㊽「**サ**」(諦)
- ㊾「**カ**」(因果) ㊿「**ク**」(尽)

また、末尾の方でよく登場する悉曇の「空点」「三昧点(画)」などは次の通りである。

後期高齢のせいか、パソコンの文字入力や漢字変換のミスに鈍感になった。誤字・脱字がありましたらご容赦を。



呷字



三味点 (「ウー、ū」)



空点 (「ム、m」)

■「吽字義」 原文・書き下し・註記・私訳・付記

■字粗

◆字相の概説

【原文】

一吽字相義分二。一解字相。二釋字義。初解字相者又分四。四字分離故。金剛頂釋此一字具四字義。一賀字義。二阿字義。三汗字義。四麼字義。

【書き下し】

一つの吽字を相と義二つに分かつ。一に字相を解し。二に字義を釋す。初めに字相を解すとは、又、四つに分かつ。四字に分離するが故に。『金剛頂』に、「此の一字を釋するに四字の義を具す。一に賀字の義、二に阿字の義、三に汗字の義、四に麼字の義なり」と。

【註記】

- ①相::「吽字」(悉曇表記)の外形。
- ②義::「吽字」(悉曇表記)の意味。
- ②四字::「*ḥa* (賀字)」「*ḥa* (阿字)」「*ḥa* (汗字)」「*ḥa* (麼字)」。
- ③『金剛頂』::『金剛頂經』系の『大樂金剛不空真実三昧耶經般若波羅蜜多理趣釈』(『理趣釈』)。

【私訳】

「吽字・𑖀」の一字を外形（字相）と意味（字義）の二つに分ける。最初に字の外形を解説し。次に字の意味を解釈する。最初に字の外形を解説するのに、また、四つに分ける。四つの字に分けられるからである。『金剛頂経』系の『大樂金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣釈』（『理趣釈』）で「吽字」を解釈しているが、この一字に四つの字の意味が含まれていると言う。（すなわち）一に賀字の義、二に阿字の義、三に汗字の義、四に麼字の義である。

◆字相の各説

◇賀（訶）字

【原文】

一賀字義者。中央本尊體是 其字也。所謂賀字是因義也。梵云係怛𑖀二合即是因縁義。因有六種。及因縁義中因有五種。如阿毘曇廣説。若見訶字門即知一切諸法無不從因縁生。是爲訶字字相。

【書き下し】

一に賀字の義とは、中央の本尊の體、是れ其の字なり。謂わゆる賀字は是れ因の義なり。梵に係怛𑖀けいとば二合と云う。即ち是れ因縁の義なり。因に六種有り。及び因縁の義の中の因に五種有り。阿毘曇に廣く説くが如し。若し訶字門を見れば、即ち一切の諸法の因縁従り生ぜざる無きを知る。是れを訶字の字相と爲す。

【註記】

①中央の本尊…中核・本体・基体。

②因∴因縁の因・因業。サンスクリットで「hetu」。この「hetu」の「he」は「ha」から転じたもの。

③係恒囀∴サンスクリットの「hetavaḥ」。男性名詞「hetu」の複数 Nominative。なぜ複数の表記を用いるのか、わからない。

④二合∴悉曇で二字による合語であることを表わす記号。語尾変化である「hetavaḥ」を「hetu」と「aḥ」という二字の合語と見たのか？

⑤阿毘曇∴アビダルマ。ここは『阿毘達磨大毘婆沙論』

### 【私訳】

最初に、「賀字 𑖀𑖄」の意味と言ったのは、(マンダラの)中央の本尊のように、「𑖀」「𑖄」「𑖀𑖄」の四字のうちの(本体となっているのがその「賀字 𑖀𑖄」である。「賀字」はいわゆる「因」の意味である。サンスクリットで「ヘータヴァハ heṭavaḥ」と言う。すなわち「因縁」の意味である。「因」には六通りある。さらには「因縁」と言う意味の「因」には五通りがある。アビダルマに広く説かれている通りである。もし「訶𑖀𑖄」字門で見れば、一切諸法は「因縁」から生じないものはないということを知る。これが「訶字」の外形の解釈である。

### ◇阿字

#### 【原文】

一阿字義者。訶字中有阿聲。即是一切字之母一切聲之體一切實相之源。凡最初開口之音皆有阿聲。若離阿聲則無一切言說。故爲衆聲之母。若見阿字則知諸法空無。是爲阿字字相。

#### 【書き下し】

一阿字の義とは、訶字の中に阿の聲有り。即ち是れ一切字の母、一切聲の體、一切實相の源なり。凡そ最初に口を開くの

音に皆阿の聲有り。若し阿の聲を離るれば則ち一切の言説無し。故に衆聲の母と爲す。若し阿字を見れば則ち諸法の空無を知る。是れを阿字の字相と爲す。

【私訳】

一に「阿字 𑖀」の意味と言ったのは、「詞字 𑖀」のなかに「阿 𑖀」の聲があるということである。「阿 𑖀」はあらゆる字の母であり、あらゆる声の本体であり、『大日経疏』に「あらゆる真実態の本源である。およそ、口を開いて最初に出る音には皆「阿」の聲がある。若し「阿」の聲がなければあらゆるコトバはない。その故に声という声の母である」と言う。もし「阿字」を見れば諸法の空や無（不生 *anupāda*）を知る。これが「阿字」の外形である。

◇汗字

【原文】

三汗字是一切諸法損減義。若見汗字則知一切法無常苦空無我等。是則損減即是字相也。

【書き下し】

三に汗字は、是れ一切諸法の損減の義なり。若し汗字を見れば則ち一切法の無常・苦・空・無我等を知る。是れ則ち損減、即ち是れ字相なり。

【註記】

①損減：すり減ること。一切諸法に自性（実体）があると見る執着が減少すること。

【私訳】

三に「汙字ふ」は、一切諸法に自性（実体）があるという執着が減少する（損滅）という意味である。もし「汙字ふ」を見れば、一切諸法が無常・苦・空・無我であることを知る。これが「損滅」で、すなわち「汙字」の外形である。

【原文】

四磨字義者。梵云恒麼此翻爲我有二種。一人我二法我。若見磨字門則知一切諸法有我人衆生等。是名增益。是則字相。一切世間但知如是字相。未曾解字義。是故爲生死人。如來如實知實義。所以號大覺。

【書き下し】

四に磨字の義とは、梵に恒麼とまと云う。此れ翻じて我と爲す。我に二種有り。一に人我、二に法我なり。若し磨字門を見れば則ち一切諸法に我・人・衆生等有るを知る。是れを増益ぞうやくと名づく。是れ則ち字相なり。一切世間は但だ是くの如くの字相を知り、未だ曾て字義を解せず。是の故に生死の人と爲す。如來は實の如く實義を知る。所以に大覺と號す。

【註記】

- ①恒麼：サンスクリットで「トマ (a)man」。
- ②人我：人や生きもの（有情）に具わっている自我。
- ③法我：人や生きもの以外（非情）の「五蘊」や外界の一切法の実体（自性）。
- ④增益：実体（自性）のないものがあるが如くにますます執着すること。

⑤眞實義…世間は法界と等同という眞實義。

⑥大覺…如來の別稱。

【私訳】

四に「麼字 𑖀」の意味と言ったのは、サンスクリットで「(a) man」と言う。これを翻訳したのが「我」である。この「我」に二通りある。一に人我、二に法我である。もし「麼字 𑖀」門を見れば、一切諸法に我・人・衆生があることを知る。これを「増益」と名づく。これが外形である。一切の世間はただこのような外形を知り、未だその字の深い意味を理解していない。その故に生死輪廻の人と言う。如來はさながらに（世間も）眞實義（であること）を知る。だから「大覺」と言う。

■字義

◆字義の概説

【原文】

一 解字義有四。訶阿汚麼四字差別故

【書き下し】

一に字義を解するに四つ有り。訶・阿・汗・麼、四字の差別あるが故に。

【私訳】

一に、卍字の意味を解説するのに四通りがある。訶字・阿字・汗字・麼字という四字のちがいがからである。

◆字義の各説

◇訶字

【原文】

初訶字實義者。所謂訶字門一切諸法因不可得故。何以故。以諸法展轉待因成故。當知最後無依。故說無住爲諸法本。所以然者以種種門觀諸法因緣悉不生故。當知萬法唯心。心之實相卽是一切種智。卽是諸法法界。法界卽是諸法之體不得爲因。以是言之因亦是法界。緣亦是法界。因緣所生法亦是法界。阿字門從本歸末畢竟到如是處。今亦訶字門亦從末歸本畢竟到如是處。阿字從本不生一切法。今亦訶字以無因待爲諸法因。終始同歸。則中間旨趣皆可矣。是名訶字實義

【書き下し】

初めに訶字の實義とは、謂わゆる訶字門の一切諸法因不可得の故に。何を以つての故に。「諸法は展轉して因を待つて成ずるを以つての故に。當に知るべし、最後は依無きが故に無住を説き諸法の本と爲す。然る所以は、種種の門を以つて諸法の因縁を觀するに、悉く不生の故に。當に知るべし、萬法は唯心なり。心の實相は卽ち是れ一切種智なり。卽ち是れ諸法法界なり。法界は卽ち是れ諸法の體なり。因と爲るを得ず。是れを以つて之を言わば、因は亦た是れ法界、縁は亦た是れ法界、因縁所生の法も亦た是れ法界なり。阿字門は本從り末に歸し、畢竟して是くの如くの處に到る。今亦た、訶字門も亦た末從り本に歸し、畢竟して是くの如くの處に到る。阿字は本不生從り一切法を生ず。今亦、訶字は無因待を以つて諸法の因と爲す。

終始同じく歸す。則ち中間の旨趣、皆知る可し。是れを訶字の實義と名づく。

【註記】

①訶字門：「訶」の字相と字義。

② 種種の門…さまざまな学派。

③ 萬法唯心…一切諸法は心作用の顯われだという唯識の説。

④ 一切種智…あらゆるものの等閑な在り様と個別具體的な在り様、空と有の、不二二体を知る仏の智慧。

⑤ 本不生…阿字本不生。阿字の外形的な字相は「本不生」（一切諸法は空であって自ら生じない *anupada*）であるが、実義では阿字から一切諸法が生じる。

⑥ 無因待…訶字の外形的な字相は「因」から生じないものはないのだが、「無因待」（「因」を待たないこと）を以って一切諸法の「因」とする）。

⑦ 中間の旨趣…阿字と訶字の中間の文字。

### 【私訳】

最初に「訶字 *ra*」のほんとうの意味（実義）から言うと、それはすなわち、「訶字」門は（字相では「因」から生じないものはないのだが）一切諸法の「因」があるとかないとか捉えようがないということである。なぜかと言えば、『大日経疏』第七に言うように「諸法は次々と展開して伝わり、その「因」とともに成り立っている（ので、そもそも固定的な「因」などない）からである。よく知っておくべきであるが、（原因のもとをどんなにたどっても）最後は抛り所となる「因」などないので、諸法は住せずと言って諸法の基本としているのである。なぜか。さまざまな学派が諸法の直接間接の原因を観察して、いずれもが本来不生と言っているからである。さらによく知っておくべきであるが、一切諸法は（存在するのではなく）ただ心作用の顯われ（表象）である。心の真実の在り様はあらゆるものの等閑な在り様と個別具體的な在り様、「空」と「有」の不二二体を知る仏の智慧である。つまり、諸法は法界であり、法界は諸法の本体であり、諸法の「因」にはならない（諸法が「因」から生じることはない）。この点から言えば、「因」も法界であり、縁も法界であり、因縁所生の諸法も法界である。「阿字」門は、本の「阿字 *ra*」から最後の「吽字 *va*」まで、畢竟このような本来の所に到る。今また、「訶字」門も

最後から最初まで、畢竟このような本来の所に到る。「阿字」は、「本不生」から一切諸法を生み出す。今また、「訶字」の外形的な字相は「因」から生じないものはない」ということだが、実義では「無因待」（「因」を待たないこと）を以って一切諸法の「因」とする。終りの「訶字」も初めの「阿字」も同じく「本不生」に帰するのである。「訶字」と「阿字」の中間の文字も、皆同様に知るべきである」と。これを「訶字」の本当の意味（実義）と言う。

◇阿字

【原文】

次阿字實義者有二義。謂不生義空義有義。如梵本阿字有本初聲。若有本初則是因緣之法。故名爲有。又阿者無生義。若法攬因緣成則自無有性。是故爲空。又不生義者即是一實境界即是中道。故龍猛云。因緣生法亦空亦假亦中。又大論明薩婆若有三種名。一切智與二乘共。道種智與菩薩共。一切種智是佛不共法。此三智其實一心中得。爲分別令人易解故作三種名。即是阿字義。

【書き下し】

次に、阿字の實義とは、三義有り。謂わく、不生の義・空の義・有の義なり。梵本の阿字の如きは本初の聲有り。若し本初有るは則ち是れ因緣の法なり。故に名づけて有と爲す。又、阿とは、生じること無しの義なり。若し法、因緣を攬とつて成ずるは則ち自ら性有ること無し。是の故に空と爲す。又、不生の義とは、即ち是れ一實いちじつの境界、即ち是れ中道なり。故に龍猛

云わく、「因緣生の法は亦た空、亦た假け、亦中なり」と。又、『大智度論』に薩婆若を明かすに三種の名有り。一切智は二乘

と共す。道種智は菩薩と共す。一切種智は是れ佛の不共法なり。此の三智は其れ實には一心中に得。分別して人をして易解せしめんが爲の故に三種の名を作す。即ち是れ阿字の義なり。

【註記】

- ①一實：唯一絶対の眞実。中道。
- ②龍猛：インド大乘中觀派の開祖、龍樹。
- ③因縁生の法は亦た空、亦た假、亦中なり：『中論』「觀四諦品」が説く「空・假・中の三諦」。
- ④薩婆若：一切（種）智。

【私訳】

次に、「阿字 𑖀」の本当の意味（実義）とは、『大日経疏』卷七に言う「三通りがある。「不生」という意味と「空」という意味と「有」という意味である。「阿字」には「本初」を意味する「adhi」という音がある。もし存在するものの原初（本初）が実在するなら、それは因縁によつて生じた法である。だからそれを「有」と言う。また、「阿 𑖀」とは、生じること無し（anupada）という意味である。もしある法が因縁所生であるなら実体（自性）がない。だから「空」と言う。また、「不生」の意味というのは、唯一絶対の眞実の境界、つまり（中觀派が説く）「中道」である。その故に龍猛菩薩が言うに、「因縁所生の諸法は空であり、また仮であり、また中である」と。また、『大智度論』には一切（種）智（薩婆若）を明らかにするのに三種の名称がある。一つには（空の）一切智は声聞・縁覚の二乗と共通する智慧。二つ目の（化他の）道種智は菩薩に共通する智慧。（空と有の不二体を知る）一切種智は仏だけの（声聞・縁覚・菩薩には共通しない）不共法である。この三つの智慧は、実は一心の中に体得されるものであるが、別々にして人にわかりやすくするために三通りの名称にしたのである。

これが「阿字」の意味である。

【原文】

又所謂阿字門一切諸法本不生者。凡三界語言皆依於名。而名依於字。故悉曇阿字亦爲衆字之母。當知阿字門眞實義亦復如是。遍於一切法義之中也。所以者何。以一切法無不從衆緣生。從緣生者悉皆有始有本。今觀此能生之緣。亦復從衆因緣生。展轉從緣誰爲其本。如是觀察時則知本不生際。是萬法之本。猶如聞一切語言時即是聞阿聲。如是見一切法生時即是見本不生際。若見本不生際者是如實知自心。如實知自心即是一切。智智。故毘盧遮那唯以此一字爲眞言也。而世間凡夫不觀諸法本源故妄見有生。所以隨生死流不能自出如彼無智畫師自運衆綵作可畏夜叉之形。成已還自觀之心生怖畏頓墜于地。衆生亦復如是。自運諸法本源畫作三界。而還自沒其中。自心熾然備受諸苦。如來有智畫師既了知己。即能自在成立大悲漫荼羅。由是而言。所謂甚深祕藏者衆生自祕之耳。非佛有隱也。是則阿字之實義也。

【書き下し】

又、『大日經疏』第七に「謂わゆる阿字門の一切諸法本不生とは、凡そ三界の語言は皆名に依る。而して名は字に依る。故に悉曇の阿字を亦た衆字の母と爲す。當に知るべし、阿字門の眞實義も亦た復た是くの如し。一切法義の中に遍するなり。

所以は何ん。一切法は衆緣従り生ぜざること無きを以つて、緣従り生ずる者は悉く皆始め有り本有り。今、此の能生の緣を觀するに、亦た復た衆の因緣従り生ず。展轉して緣に従う。誰か其の本と爲る。是くのごとく觀察する時、則ち本不生際は是れ萬法の本と知る。猶し一切の語言を聞く時に即ち是れ阿の聲を聞くが如し。是くの如く、一切法の生じるを見る時、即

ちほんぶしようざいは是れ本不生際を見るなり。若し本不生際を見る者は、是れ「實の如く自心を知る」。實の如く自心を知るは即ち是れ一切智なり。故に毘盧遮那は唯だ此の一字を以つて眞言と爲すなり。而して、世間の凡夫は諸法の本源を觀ぜざるが故に妄りに生じること有りと見る。所以に、生死の流れに隨い自ら出ること能わず。彼の無智の畫師、自ら衆綵しゆさいを運んで畏るべき夜叉の形なを作し、成し已つて還つて自ら之を觀て心に怖畏を生じて頓たちまちに地に躓つひうるが如し。衆生も亦た復た是くの如し。自ら諸法の本源を運んで三界を畫作し、而して還つて自ら其の中に没し、自心に熾然しねんにして備つひに諸苦を受く。如來の有智の畫師は既に了知し已り、即ち能く自在に大悲漫荼羅を成立じよつりやうす。是れに由つて言わば、謂わゆる甚深祕藏とは、衆生の自ら之を祕すのみ。佛の隠くすこと有ら非るなり」と。是れ則ち阿字の實義なり。

【註記】

- ①阿字門：「𑖀」の字相と字義。
- ②名：コトバの分節。
- ③悉曇：サンスクリットのアルファベットの梵字表記。
- ④衆綵：種種のいろどり。多色。
- ⑤熾然：さかんに。

## 【私訳】

又、『大日経疏』第七に「いわゆる「阿字 𑖀」門（の字義）が、一切諸法はもともと自ら生じるのではないといふのは、総じて言えば、凡夫・衆生の欲界・色界・無色界（三界）の言語はすべて（如来の）コトバの分節に依っていて、しかも、その分節は文字で凡夫・衆生の三界に現われている。だから、悉曇で書く「𑖀」字をあらゆる文字の字母としている。よく知っておくべきで、「阿字」門のほんとうの意味もまたこれと同じで、それは一切諸法の意味のなかに満ちているのである。そのわけは何かと言え、一切諸法は諸々の縁から生じないものはないのだから、縁から生ずるモノにはみな始め（の縁）があり本（になる縁）がある。今、このあらゆるものを生み出す能生の縁を観察すると、また多くの因縁から生じている。次々と連なり転じて縁に従っている。どの縁がその本源かわからない。このように観察すると、もともと一切諸法は自ら生じるのではないという本不生際は一切諸法の本源であることがわかる。これを言語で言えば、ちようど、一切の言語を聞く時、そのなかに「𑖀」の声を聞くのと同じである。このように、一切法の生じるを見る時、本不生際を見るのである。もし本不生際を見る人は、『大日経』住心品に言う「実の如く自心を知る」のである。「実の如く自心を知る」とは「一切智智」（仏智）である。だから、毘盧遮那如来はただ「阿字 𑖀」の一字をその真言とするのである。然るに、世間の凡夫は諸法の本源を観察などしないから、みだりに一切諸法は自ら生じるものと見ている。だから、生死の輪廻に漂い、自力でそこから出ることができない。まるで、仏道に無知な絵師が、自らいろいろな色を持ち出して畏るべき夜叉の絵を画き、画き終つて自らそれを見て心に恐怖を抱き、にわかに地べたにいざつて歩くのと同じである。衆生もまたこれと同様である。自ら諸法の本源を持ち出して三界を画き、そしてそのなかに自ら埋没し、さかんに自らの心に諸々の苦をみな受容している。如来と、いわく智慧ある絵師はすでに本不生際を充分に知っていて、自在に大悲利他の曼荼羅を造っている。この意味で言えば、いわゆる甚深祕藏というのは、衆生が自らこれを祕しているだけで、仏が隠しているのではない」と。これがすなわち「阿字」のほんとうの意味なのである。

【原文】

又經云。阿字者是菩提心義。是諸法門義。亦無二義。亦諸法果義。亦是諸法性義是自在義。又法身義。如是等義皆是阿字實義也。又守護國界主陀羅尼經說。爾時一切法自在王菩薩摩訶薩白佛言。

【書き下し】

又、〔守護國界主陀羅尼〕經に云わく、「阿字とは、是れ菩提心の義、是れ諸法門の義、亦た無二の義、亦た諸法果の義、亦た是れ諸法性の義、是れ自在の義、又、法身の義なり」と。是くの如き等の義、皆是れ阿字の實義なり。又、  
『守護國界主陀羅尼經』しゅこくがいしゅだらにきょうに説く、「爾の時、一切法自在王菩薩摩訶薩、佛に白して言さく」と。

【註記】

- ① 『守護國界主陀羅尼經』…宗祖大師の長安におけるサンスクリットの師、醴泉寺の般若三藏・牟尼室利三藏の共訳。陀羅尼の靈力によって国主を守護することが、すべての衆生を守ることと国家鎮護を説く密教經典。
- ② 一切法自在王菩薩摩訶薩…一切法において無自性・空の自在を得た菩薩。

【私訳】

また、『守護國界主陀羅尼經』に言うに、「阿字とは、これ菩提心の意味、諸々の法門の意味、無二の意味、仏法の成果の意味、諸々の真実性の意味、自在の意味、また、法身の意味である」と。このような意味が「阿字」のほんとうの意味である。また『守護國界主陀羅尼經』に説く、「その時一切法自在王菩薩摩訶薩、佛に白して言さく。(以下、阿字の百義を説く)」と。

◇汗字

【原文】

三汗字實義者。所謂汗字門一切諸法損減不可得故。是名字義。

【書き下し】

三に、汗字の實義とは、謂わゆる汗字門は一切諸法損減不可得の故に、是れを字義と名づく。

【註記】

①汗字門：汗字の字相と字義。

②一切諸法損減不可得：一切諸法への執着が損傷したり縮小したりすることはわからないという意味。「損減」は、サンスクリットで「una」。「不足」「未滿」「過少」などの意味であるが、仏典では「損減」「減」と漢訳される。

【私訳】

三に、「汗字 𑖀」のほんとうの意味とは、すなわち、「汗字 𑖀」門は一切諸法損減不可得であるから、これを字義と言う。

【原文】

復次一心法界猶如一虚常住。塵數智慧譬如三辰本有。雖云高山干漢曾臺切天。而不損減者大虚之徳也。雖云劫水漂地猛火燒臺。而不増益者大虚之徳也。一心虚空亦復如是。雖云無明住地無邊際。我慢須彌無頭頂。而一心虚空本來常住不損不減。是則汗字實義也。雖六師外道撥無因果。三密虚空本來湛然無損無減。是名汗字實義。

【書き下し】

復た次に、「一心法界は猶し一虚の常住の如く、塵數の智慧は譬えば三辰の本有の如し。高山漢を干かし、曾臺天を切ると云うと雖も、而して損減せざるは大虚の徳なり。劫水地を漂し猛火臺を焼くと云うと雖も、而して増益せざるは大虚の徳なり。一心の虚空亦た復た是くの如し。無明の住地邊際無く、我慢の須彌頭頂無しと云うと雖も、而して一心の虚空は本來常住にして損せず、減せず。是れ則ち汗字の實義なり。六師外道因果を撥無すと雖も、三密の虚空は本來湛然として損も無く減も無し。是れを名汗字の實義と名づく。

【註記】

- ① 一心法界…衆生の不二の心に宿る眞実の世界（法界）。
- ② 一虚…唯一の虚空。
- ③ 三辰…日辰・月辰・星辰。
- ④ 漢…天。
- ⑤ 曾臺…高台。
- ⑥ 劫水…世界の終末の水災劫に起る大洪水。
- ⑦ 六師外道…釈尊と同じ時代の六人の思想家。プーラナ・カッサパ（道德否定論）、パクタ・カッチャーヤナ（要素集合論）、アジタ・ケーサカンバリン（唯物論）、マツカリ・ゴーサーラ（邪命外道、宿命論）、サンジャヤ・ペーラッティブツダ（不可知論）、マハーヴェーラ（ニガンタ・ナータブツダ、ジャイナ教）。
- ⑧ 湛然…静寂不動であること。

## 【私訳】

また次に、衆生の不二の心に宿る真実の世界（法界）は、ちょうど唯一の虚空が常住不変であるのと同じく、（真実の世界の）塵の数ほどの無数の智慧は、譬えば日辰・月辰・星辰がもともとあるのとおなじである。高い山は天を犯し、高台は天を切ると言うとはいえ、それでも自ら損傷したり縮小したりしないのは広大な虚空の徳である。世界の終末の水災劫に起る大洪水が大地に満ち、大火災が高台を焼くと言つても、それでも増大したり満ちたりしないのは広大な虚空の徳である。衆生の不二の心に宿る虚空は以上の通りで、「無明」の心位は限界がなく我執は須弥山の頂上さえもないくらいだと言つても、それでも衆生の不二の心に宿る虚空はもともと常住にして損傷もせず、縮小もしない。これが「汗字」のほんとうの意味である。六師外道は仏教の説く因果の道理を否定するが、密教の言う「三密」は、虚空のように、そもそも静寂不動で損傷もなく、縮小もない。これが「汗字」のほんとうの意味である。

## 【原文】

諸三乘等學無我之利斧斫身心之柴薪。然猶一心本法寧有損滅。故名汗字不損滅。又大乘空觀之猛火燒人法執著之塵垢無有遺餘。三密不損猶如火布垢盡衣淨。汗字實義亦復如是。復次或破遍計之層樓壞依他之幻城。三密本法豈有毀傷乎。汗字實義應如是知。又有人厭有爲之非眞欣無爲之離妄。絶言語道於癡詮之門。滅心行處於寂滅之津。於此三密本法何曾絶滅。汗字實義應當知之。

## 【書き下し】

諸々の三乗等、無我の利斧<sup>りふ</sup>を擧げ、身心の柴薪<sup>さいしん</sup>を斫る。然れども猶、一心の本法は寧ろ損滅有らん。故に汗字の不損滅と名づく。又、大乘の空觀の猛火、人法執著の塵垢を燒き遺餘有ること無けれども、三密の損せざること、猶し火布の垢盡きて

衣淨きが如し。汗字の實義亦た復た是くの如し。復た次に、或いは遍計へんけの蜃樓しんろうを破し、依他えたの幻城げんじょうを壞すれども、三密の本  
法は豈に毀傷きしょう有らんや。汗字の實義、應に是くの如く知るべし。又、人有ういつて有爲ういの眞に非ざるを厭むいい、無爲むいの妄を離るる  
を欣んで、言語の道を癡詮はいせんの門に絶し、心行の處を寂滅の津に滅すれども、此の三密の本法の於いて何ぞ曾て絶滅せん。汗  
字の實義、應に當に之を知るべし。

【註記】

- ①利斧リブツ…鋭い斧。
- ②柴薪チシキ…柴と薪。燃料。五蘊ごいんの比喻。
- ③火布カフ…火浣布。中国南部の火山に棲む火ネズミの毛で作った耐火性の布。石綿。
- ④遍計へんけ…遍計所執性。唯識ゆいしが言う「三性」の一つ。あらゆるものは私たちの主觀が妄執むじによって認識した虚妄、という見方。
- ⑤蜃樓しんろう…蜃気楼。
- ⑥依他えた…依他起性。唯識ゆいしが言う「三性」の一つ。あらゆるものは因縁いんげんによって他に依存して生ずる、という見方。
- ⑦幻城げんじょう…乾闥婆城くわんたつばじょう。乾闥婆神の幻術によって空中に現われた幻の樓城。蜃気楼。
- ⑧有爲うい…有爲法。因縁いんげんによって生じるもの。
- ⑨無爲むい…無爲法。生滅しんめつ転変てんぺんしない常住じょうず不変ふへんのもの。
- ⑩癡詮はいせん…癡詮談旨。言語で言い表わせない、の意。言亡慮絶。

## 【私記】

声聞・縁覚の修行に励む諸々の二乗の人は、「無我」という鋭い斧を持ち上げて、身心の（我執の）燃料の「五蘊」を砕く。しかしなお、衆生の不二の心に宿る真実の仏法（密教）には損傷や縮小がない。だから、「汗字」のほんとうの意味を不損減と言っているのである。また、大乘（中観派）の空觀の猛火は、人・法への執著の塵や垢れを焼き、余すところがないのであるが、生仏不二の「三密」（平等）は損減はしない。ちょうど中国南部の火山に棲む火ネズミの毛で作った耐火性の布（火布）が、火で焼けば垢れがなくなるだけで燃えず、その火布でできた衣服の汚れがとれて淨められるのと同じことである。「汗字」のほんとうの意味はまたこのようなことである。また次に、（唯識派が）「遍計所執性」を説いて実在しない蜃気楼を破壊し、「依他起性」を説いて幻の城（「乾闥婆城」）を破壊するけれども、生仏不二の「三密」（平等）にどうして損傷などあるであろうか。「汗字」のほんとうの意味は、まさしくこのように知るべきなのである。また、ある人が、因縁所生の有爲法は真実ではないとそれを嫌い、常住不変の無爲法は妄執を離れているとそれを欣こび、コトバで言い表わす方法をコトバでは言い表せない（麁詮談旨・言亡慮絶）という考え方で拒絶し、心のはたらく処を寂滅の境地に滅除するけれども、この「三密」平等のほんとうの仏法（密教）において、拒絶や滅除などどうしてあるだろうか。「汗字」のほんとうの意味とは、まさしくこのように知るべきなのである。

## 【原文】

所謂損減者苦空無常無我故。四相遷變故。不得自在故。不住自性故。因縁所生故。相觀待故。以是六義故名諸法損減。今所謂汗字實義者不如是也。經云。汗字報身義。此報者非因縁酬答之報果。相應相對故名曰報也。此則理智相應故曰報。心境相對故曰報也。法身智身相應無二故名報。性相無礙涉入故曰報。體用無二相應故曰報也。是故常樂我淨汗字實義無損減故。一如不動汗字實義無異相遷變故。十自在是汗字實義無罣礙故。本住體性汗字實義不改轉故。遠離因縁汗字實義本來不生等虛空故。超過觀待汗字實義同一性故。復次因縁生法必帶四相。帶四相故變壞無常。變壞無常故苦空無我。苦空無我故不得自在。

不得自在故不住自性。不住自性故高下相望尊卑重重。若以劣望勝劣則爲損。以下比上下則名減。如是損減其數無量。誠是背本向末違源順流之所致也。是故三界六道。長迷一如之理。常醉三毒之事。荒獵幻野無心歸宅。長眠夢落覺悟何時。今以佛眼觀之。佛與衆生同住解脫之床。無此無彼無二平等。不增不減周圍周圓。既無勝劣增益之法。何有上下損減之人。果名汗字實義。

【書き下し】

謂わゆる損減とは、苦・空・無常・無我の故に、四相遷變せんへんの故に、不得自在の故に、不住自性の故に、因縁所生の故に、相觀待そうかんたいの故に、是の六義を以つての故に、諸法の損減と名づく。今、謂わゆる汗字の實義とは、是くの如くならずなり。『(守護国界主陀羅尼)經』に云わく。「汗字は報身の義なり」と。此の報とは、因縁酬答しゅうたうの報果に非ず。相應・相對の故に名づけて報と曰うなり。此れ則ち理智相應するが故に報と曰う。心境相對するが故に報と曰うなり。法身智身相應して無二なるが故報と名づく。性相無礙しやうざうにして涉入するが故に報と曰う。體用無二たいゆうにして相應するが故に報と曰うなり。是の故に、常樂我淨は汗字の實義なり。損減無きが故に。一如不動は汗字の實義なり。異相遷變無きが故に。十自在は是れ汗字の實義なり。罣礙無きが故に。本住體性は汗字の實義なり。改轉せざるが故に。遠離因縁は汗字の實義なり。本來不生にして虚空に等しきが故に。超過觀待は汗字の實義なり。同一性の故に。復た次に、因縁生の法は必ず四相を帶す。四相を帶するが故に變壞無常へんねなり。變壞無常の故に苦・空・無我なり。苦・空・無我なるが故に不得自在なり。不得自在なるが故に不住自性。不住自性なるが故に高下相望して尊卑重重なり。若し劣を以つて勝に望めば、劣は則ち損と爲る。下を以つて上に比すれば、下則

ち滅と名づく。是くの如く、損滅は其の數無量なり。誠に是れ本に背き末に向かい、源に違い流れに順するの致す所なり。

是の故に、三界・六道は長く一如の理に迷い、常に三毒の事に酔い、幻野こうりように荒獵して心は宅ぼつらくに歸ること無く、夢落じようみんに長眠す。覺悟何れの時ぞ。今、佛眼を以って之を觀るに、佛と衆生と同じく解脱の床に住す。此れも無く無も無く、無二平等なり。不増不減にして、周圓周圓なり。既に勝劣増益の法無く、何ぞ上下損滅の人有らん。是れを汗字の實義と名づく。

【註記】

①四相遷變…生じ・留まり・変異し・滅する（四相）を轉變すること。

②相觀待…あらゆるものは相依相待の關係にあつて、それ自体で生じるものではないこと（中觀）。

③酬答…報いる、返礼・謝礼・返答・応答。

④性相…本性（体）と外形（相）。

⑤常樂我淨…無常を常、苦を樂、無我を我、不淨を淨と見る衆生の邪見。仏教が否定する四顛倒を密教は生仏不二の立場で肯定する。

⑥一如不動…真如の眞実不変。

⑦異相遷變…生・住・異・滅の四相が変転すること。

⑧十自在…命（寿命）自在・心自在・資具（莊嚴）自在・業自在・受生自在・解（解脱）自在・願自在・神力自在・法自在・智自在。

⑨本住體性…本来住すべき法界の本性。

⑩遠離因縁…因縁生を遠離していること。

⑪超過觀待…二項対立を超越した不二体。

⑫ 高下相望…高低を比べる。

⑬ 周圓…あまねく丸い。

【私訳】

ここに述べている「損減」とは、(次の六通りの見方がある)

- 1、(世間は) 苦である、一切法はみな空である、諸行は無常である、諸法は無我であるから、という見方。
  - 2、生じ・留まり・変異し・滅する、の四相を転変するから、という見方。
  - 3、煩惱によつて自在を得られないから、という見方。
  - 4、無自性・空の故に自性(事物・事象の実体)に執着できないから、という見方。
  - 5、因縁所生の故に、あらゆるものは因と縁によつて生ずるものであるから、という見方。
  - 6、あらゆるものは相依相待の関係にあつて、それ自体で生じるものではない、という見方。
- この六通りの見方をもつて、(一般的には) 諸法の「損減」と言う。

(然るに) 今、(密教の立場で) 「汗字」のほんとうの意味を言うと、以上のような見方ではない。『(守護国界主陀羅尼) 經』に「汗字とは報身の意味である」と説かれていて、この「報」というのは、(過去世における修行の善因善果といった) 因縁の報いとしての結果ではない。

- 1、二項二律が互いに二而不二の関係で相応・相對している意味で「報」と言う。
- 2、真如・法如の真実の理法とその真実を悟った智慧とが不二で相応していると言う意味で「報」と言う。
- 3、心(認識主体)と境(認識対象)とが不二の関係で相對しているという意味で「報」と言う。
- 4、法身と智身とが不二の関係で相応しているという意味で「報」と言う。

- 5、諸法の本性（体）と外形（相）とが妨げるものなく相即相入しているという意味で「報」と言う。
- 6、本体（体）とはたらき（用）とが不二体の関係で相応しているという意味で「報」と言う。

（密教ではこのような見方をするので）、

- 1、諸行無常ではなく「常」、苦ではなく「楽」、無我ではなく「我」、汚ではなく「浄」というのが汗字のほんとうの意味なのである。（一般的に言う）「損滅」がないからである。
- 2、不二一如の眞実不変は汗字のほんとうの意味である。生・住・異・滅の四相が変転することがないからである。
- 3、十通りの「自在」は汗字のほんとうの意味である。心の妨げがないからである。
- 4、本来住すべき法界の本性は汗字のほんとうの意味である。常住不変だからである。
- 5、因縁生を遠離していることは汗字のほんとうの意味である。諸法は本不生であり生滅のない虚空に等しいからである。
- 6、二項対立を超越した不二体は汗字のほんとうの意味である。同一性だから。

また次に、因縁によって生じる諸法は必ず生・住・異・滅の四相を帯びている。四相を帯びているから変化したり壊れたりして無常である。変壊無常であるから苦であり空であり無我である。苦・空・無我であるから自在を得ない。自在を得ないから自性（事物・事象の実体）に執着できない。自性（事物・事象の実体）に執着できないから高低を比べたり尊卑を較べたり、さまざまである。もし、劣っている者を勝れた者に比べれば、劣はすなわち損である。下の者を上の者に比べれば、下はすなわち減である。このように、「損滅」はその数は無数である。まさしくこれは、本初に背を向け末節に向かい、水源と反対に水の流れにまかせるようなものである。だから、欲界・色界・無色界の「三界」や地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の「六道」は、長く不二一如の道理に迷い、常に貪・瞋・痴の「三毒」の事物・事象に酔い、実在しない幻の野に意味なくさまよい、心は眞実の家に帰ることなく、夢の世界に長く惰眠している。悟ることなどいつになろうか。今、仏のまなざ

して以上のように（密教の立場で）観察すると、仏と衆生と同じく解脱の境地に住している。此もなく彼もなく、無二平等である。増大することもばく減少することもなく、あまねく丸い。すでに諸法に勝劣・増益はなく、上下・損減を言う人があるだろうか。これを「汗字」のほんとうの意味と言うのである。

### 【付記】

「汗字 ぶ」はサンスクリット「*ṅa*」の最初の文字で「損減」を字義とする。「*ṅa*」は「少ない」「不足の」「過少の」「劣る」「欠」「少」、「減」「損減」、「未満」といった意味をもつ（『梵和大辞典』）。この字義の「損減」には、一般的な仏教の理解では六通りの意味（「六義」）があるが、密教の立場では『守護国界主陀羅尼經』が言う「報身」で、その「報」とは先ず「過去世において行じた修行の報果」という意味ではなく、二項二律の相應不二という考え方であると言って六通りの二而不二を挙げている。そして、その密教的立場で先に言った「六義」を解釈すると、

- 1、仏教の一般的な理解の無常は密教では常、苦は楽、無我は我、不浄は浄と、二而不二に価値転換するのが、「汗字」のほんとうの意味（実義）なのである。
  - 2、二項二律を相対的に見ず不二一如に見る密教の真実不変の立場。
  - 3、同じく十自在も密教では真実不変。
  - 4、同じく本来住すべき法界の本性も密教では真実不変。
  - 5、相対的な因縁生を遠離していることも密教では真実不変。
  - 6、中観派が言う相依相待の縁起も密教では二而不二。
- すなわち、密教では相対関係を超越するので、諸法に「損減」を想定しない、と言っている。

この「損減」という概念、仏教教理としてどこまで重要なのか、私にはよくわかっていないが、宗祖大師はこの「汗字」門の「損減」について相当に念を入れている。次の「旋陀羅尼門に約して釈す」に至っては、「汗字」門に「損減」なきことを悉曇の二十九字の字義を用いて説いている。

### 【原文】

復次約旋陀羅尼門釋者。一切諸法本不生故汗字門無損減。諸法離作業故汗字門亦無損減。諸法等虚空無相故汗字門亦復等虚空無損減。諸法無行故汗字門亦復無行。諸法無一合相故汗字門亦復無一合相。諸法離遷變故汗字門亦離遷變。諸法無影像故汗字門亦無影像。諸法無生故汗字門亦復無生。諸法無戰敵故汗字門亦無戰敵。諸法無慢故汗字門亦無慢。諸法無長養故汗字門亦無長養。諸法無怨對故汗字門亦無怨對。諸法無執著故汗字門亦無執著。諸法如如不可得故汗字門如如不可得。諸法住處不可得故汗字門亦無住處。諸法施不可得故汗字門亦無捨施。諸法法界不可得故汗字門亦無法界。諸法第一義不可得故汗字門亦無勝義。諸法不堅如聚沫故汗字門亦無聚沫。諸法縛不可得故汗字門亦無縛脫。諸法有不可得故汗字門亦復無有。諸法乘不可得故汗字門亦復無乘。諸法塵垢不可得故汗字門亦無塵垢。諸法相不可得故汗字門亦復無相。諸法離言說故汗字門亦無言說。諸法本寂故汗字門本來寂靜。諸法性鈍故汗字門亦復性鈍。諸法諦不可得故汗字門諦不可得。諸法因不可得故汗字門因不可得。因不可得則本初不生。本初不生則不增不減。不增不減則大般涅槃果海。台般涅槃果海則如來法身。是名汗字實義。

### 【書き下し】

復た次に、せんだらにもん旋陀羅尼門に約して釋せば、

一切諸法本不生の故に汗字門に損減無し。

諸法は離作業きしうの故に汗字門亦た損減無し。

諸法は等虚空にして無相の故に汗字門亦た復た等虚空にして損減無し。

諸法は無行の故に汗字門亦た復た無行なり。

諸法は無一合相の故に汗字門亦た復た無一合相なり。

諸法は遷變を離るるが故に汗字門亦た遷變を離るるなり。

諸法は影像ようぞう無きが故に汗字門亦た影像無きなり。

諸法は生ずること無きが故に汚字門亦た復た生ずること無し。

諸法戰敵せんじやく無きが故に汗字門亦た戰敵なし。

諸法慢無きが故に汗字門亦た僞慢無し。

諸法長養無きが故に汗字門亦た長養無し。

諸法怨對無きが故に汗字門亦た怨對無し。

諸法執著無きが故に汗字門亦た執著無し。

諸法如如不可得の故に汗字門も如如不可得なり。

諸法住處不可得の故に汗字門亦た住處無し。

諸法施不可得の故に汗字門亦た捨施無し。

諸法法界不可得の故に汗字門亦た法界無し。

諸法第一義不可得の故に汗字門亦た勝義無し。

諸法不堅なること聚沫の如くが故に汗字門亦た聚沫無し。

諸法縛不可得の故に汗字門亦た縛脱無し。

諸法有不可得の故に汗字門亦た復た有無し。

諸法乘不可得の故に汗字門亦た復た乘無し。

諸法塵垢不可得の故に汗字門亦た塵垢無し。

諸法相不可得の故に汗字門亦た復た相無し。

諸法離言説の故に汗字門亦た言説無し。

諸法本寂の故に汗字門も本來寂靜なり。

諸法性鈍の故に汗字門亦た復た性鈍なり。

諸法諦不可得の故に汗字門諦不可得なり。

諸法因不可得の故に汗字門も因不可得なり。

因不可得は則ち本初不生なり。本初不生は則ち不増不減なり。不増不減は則ち大般涅槃の果海なり。大般涅槃の果海は則ち如來法身なり。是れを名汗字の實義と名づく。

### 【註記】

①旋陀羅尼門…陀羅尼の文字を輪の形でつなぎ旋らせ、その文字の字義を順逆に觀じて体得する觀法。字輪觀。

### 【私訳】

また次に、悉曇文字を円環的につなぎ旋らせ、その文字の字義を順逆に觀じて体得する旋陀羅尼門の立場で解説すれば、

- ▼諸法は本不生 (adī-*anupāda*) であるから、「本不生」という字義を意味する「**𑖀**」は汗字門 (ふ) を「損減」しない。
- ▼諸法は作業 (kāya) を離れているから、「作業」という字義を意味する「**𑖁**」は汗字門を「損減」しない。
- ▼諸法は等虚空 (kha) に等しく決まった姿・かたちがないから、「等虚空」を意味する「**𑖂**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は去・来などの行 (gati) がないから、「行」という字義を意味する「**𑖃**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は一つに和合した姿・かたち (ghana) ではないから、「一合相」を意味する「**𑖄**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は遷変 (vyūti) を離れているから、「遷変」という字義を意味する「**𑖅**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は影像 (chaya) がないから、「影像」という字義を意味する「**𑖆**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は生ずること (jati) がないから、「生」という字義を意味する「**𑖇**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は戦敵 (jhalā) がないから、「戦敵」という字義を意味する「**𑖈**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は慢 (ānka) がないから、「驕慢」という字義を意味する「**𑖉**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は長養 (vihāpana) がないから、「長養」という字義を意味する「**𑖊**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は怨対 (dānara) がないから、「怨対」という字義を意味する「**𑖋**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は執著 (dhanga) がないから、「執著」という字義を意味する「**𑖌**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は如如 (tathatā) で認識できないから、「如如」という字義を意味する「**𑖍**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は住処 (sthāna) を認識できないから、「住処」という字義を意味する「**𑖎**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は施 (dāna) を認識できないから、「施」という字義を意味する「**𑖏**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は法界 (dharma-dhātu) を認識できないから、「法界」という字義を意味する「**𑖐**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は第一義 (parama-*artha*) を認識できないから、「第一義」という字義を意味する「**𑖑**」は汗字門を「損減」せず。
- ▼諸法は聚沫 (phena) のように堅くないものを認識しないから、「聚沫」という字義を意味する「**𑖒**」は汗字門を「損減」せず。

- ▼諸法は縛 (bandha) を認識できないから、「縛脱」という字義を意味する「𠄎」は汗字門を「損減」せず。
  - ▼諸法は有 (bhava) を認識できないから、「有」という字義を意味する「𠄎」は汗字門を「損減」せず。
  - ▼諸法は乘 (yana) を認識できないから、「乘」という字義を意味する「𠄎」は汗字門を「損減」せず。
  - ▼諸法は塵垢 (rajas) を認識できないから、「塵垢」という字義を意味する「𠄎」は汗字門を「損減」せず。
  - ▼諸法は相 (lakṣaṇa) を認識できないから、「相」という字義を意味する「𠄎」は汗字門を「損減」せず。
  - ▼諸法は言説 (vac) を離れるから、「言説」という字義を意味する「𠄎」は汗字門を「損減」せず。
  - ▼諸法は本寂 (śanti) であるから、「本來寂靜」という字義を意味する「𠄎」は汗字門を「損減」せず。
  - ▼諸法は性鈍 (jada) であるから、「性鈍」という字義を意味する「𠄎」は汗字門を「損減」せず。
  - ▼諸法は諦 (satya) を認識できないから、「諦」という字義を意味する「𠄎」は汗字門を「損減」せず。
  - ▼諸法は因 (hetu) を認識できないから、「因」という字義を意味する「𠄎」は汗字門を「損減」しない。
- 「𠄎」は「𠄎」で表わす「因不可得」はすなわち「𠄎」で表わす「本初不生」の境地である。本來不生不滅とはすなわち不増不減でもある。不増不減はすなわち大般涅槃の境地である。大般涅槃の境地は如來の仏身である。これが汗字のほんとうの意味である。

### 【付記】

悉曇文字を円環的につなぎ旋らせ、その文字の字義を順逆に観じて体得する、いわゆる「字輪觀」を宗祖大師は旋陀羅尼門と言っている。その実際は、例えば「十八道念誦法」では、「おんばらだはんどめい うん」という真言の一字一字の字義が不可得と観じられている。

観ぜよ、我が心に八葉の白蓮華有り、上に満月輪有り、其の上に「おんばらだはんどめい うん」の字有り。



【原文】

三界業報 六道苦身 即生即滅 念念不住 無體無實 如幻如影 分段變易 因緣生法 九百生滅 如焰如流 藏海常住  
七波推轉 爾許無常 能毀能損 於此本有 何勞何憂 汚字實義 應如是知 日月星辰 本住處空 雲霧蔽虧 烟塵映覆  
愚者視之 謂無日月 本有三身 亦復如是 無始以來 本住心空 覆以妄想 纏以煩惱 事均篋境 理同礦珠 妄者視之  
謂無本覺 愚盲撥無 非損而何 於彼本身 損滅不得 汚字實義 應如是知

【書き下し】

三界の業報 六道の苦身 即生即滅にして 念念不住なり 體も無く實もなく 幻の如く影の如し 分段變易 因緣生の

法は 九百を生滅して 焰の如く流の如く 藏海は常住なるも 七波推轉す 爾許の無常 能く毀し能く損するも 此の本

有に於いて 何ぞ勞し何ぞ憂えん 汗字の實義 應に是くの如く知るべし 日月星辰は 本より處空に住するも 雲霧は

蔽虧し 烟塵は映覆す 愚者は之を觀て 日月無しと謂う 本有の三身も 亦た復た是くの如し 無始より以來 本より心

は空に住するも 覆うに妄想を以つてし 纏うに煩惱を以つてす 事は篋鏡に均しく 理は礦珠に同じ 妄者は之を視

て 本覺無しと謂う 愚盲の撥無 損に非らずして何ん 彼の本身に於いて 損滅不得なり 汚字の實義 應に是くの如く

知るべし

【註記】

- ①業報：宿業の報い。
- ②苦身：受苦の身の上。
- ③念念：時々刻々。
- ④分段：分段生死。身体の大小や寿命の長短によって輪廻をさまよう衆生の生死。
- ⑤變易：身体や寿命の差なく自在に改変できる菩薩の生死。
- ⑥藏：藏識・アーラヤ識。
- ⑦七：六識と末那識。前七識。妄識。
- ⑧本有：法界の法爾自然。
- ⑨日月星辰：太陽・月・星座。
- ⑩蔽虧：覆い隠す。
- ⑪映覆：映し覆う。
- ⑫本有の三身：衆生本有の法身・報身・応身。
- ⑬篋鏡：箱のなかの鏡。
- ⑭礦珠：原石のままの珠。
- ⑮本覺：もともと覚っていること、本来成仏。
- ⑯愚盲：凡夫・衆生。

【私訳】

凡夫・衆生が生死をくり返す輪廻の「三界」（欲界・色界・無色界）の宿業の報い 「六道」（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人

間・天)をさまよう受苦の身の上 生じては滅し滅しては生じ 時々刻々とどまることなし 本体もなく実体もなく ただ、在るように見えて実際はない幻や影と同じ 身体の大小や寿命の長短のちがいによつて輪廻をさまよう「分段生死」(衆生)と、身体や寿命の差なく自在に改変できる「變易生死」(菩薩) 因縁によつて生じる諸法は 九百回生滅しても 火炎の如く流水の如く 心の奥にある第八識のアーラヤ識の海は常住不変であるが 六識と末那識の七種の妄識の荒波が押し寄せる わずかな無常の風でも 人の心を壊し傷つけるが この法界の法爾自然においては 氣づかいたり憂えることはない 「汗字」のほんとうの意味を まさに以上のように知るべきである

太陽・月・星座は もともと處空に輝くものだが 雲や霧が覆い隠し 煙や塵が映し覆う 外道(愚者)はこれを見て 太陽も月もないと言う 本来具有しているはずの法身・報身・応身も同様である 始めのない太古から 本来心は空に住しているはずだが 妄想で覆われ 煩惱にまどわりつかれている 現象の世界(事)は箱のなかの鏡と同じ 真理の世界(理)は原石のままの寶石と同じで 迷妄にさまよう人はこれを見て 本来得ているサトリもないと言う 外道(愚者)の否定は損でなくて何であろう 外道の本来の仏身において 「損滅」は不可得である 「汗字」のほんとうの意味を まさにこのように知るべきである

### 【付記】

ここから韻文によつて「凡夫・外道」「声聞・縁覺(二乗)」「唯識(法相)」「中觀(三論)」「天台」「華嚴」の順に、密教の立場から「損滅」の不可得、すなわち「汗字」の実義が説かれる。まず最初に「凡夫・外道」について説かれた。

### 【原文】

決定二乗 妄生滅想 燒滅身智 同彼大虚 沈醉味酒 不覺不醒 決定不定 輕重有差 空歷劫數 損無過此  
本有三身 儼然不動 遍空諸佛 驚覺開示 乃起化城 迴趣寶所 草木也成 何況有情 妄執不了 爲損是多

汚字實義 當如是知

【書き下し】

決定の二乗は 妄りに滅想を生じ 身智を燒滅して 彼の大虚に同じ 味酒に沈酔して 覺らず醒めず 決定と不定と  
輕重に差有るも 空しく劫數を歴て 損此れに過ぎたるはなし (密教が言う) 本有の三身は 儼然として動ぜず 空に遍  
する諸佛 驚覺し開示すれば 乃ち化城より起つて 寶所に迴趣す 草木也成ず 何に況んや有情をや 妄りに不了を  
執すれば 損を爲すこと是れ多し 汗字の實義 當に是くの如く知るべし

【註記】

- ① 決定の二乗…生来声聞・縁覺の二乗になることが決定している人。
- ② 滅想…身心の滅することを思い描くこと。
- ③ 身智…灰身滅智。身をすべて焼いて灰にし煩惱を滅する智慧。上座部の最高の境地。
- ④ 儼然…確固として。
- ⑤ 空…虚空。
- ⑥ 驚覺…目覚めさせること。
- ⑦ 化城…前出の幻城。乾闥婆城、蜃氣楼。
- ⑧ 寶所…真実の宝処、サトリ。

⑨有情…ここは、草木に対して人間の意味。

⑩不了…不了義。不完全な教え。小乗。

【私訳】

生来、声聞・縁覚の二乗になることが決定している人は、やたら身心の滅することを思い描き、身をすべて焼いて灰にし煩惱を滅する智慧（「灰身滅智」）は、大虚空と同じである。その等虚空の智慧のうま酒に酔い沈み、覚ることもなく醒めることもない。二乗に決定されているのとそうでないと、軽重に差はあるが、空しく長い年月が過ぎて、これ以上の損があるうか。（密教が言う）本来具有している法・報・応の三身は、確固として動じない。虚空に遍満する諸佛が、二乗を目覚めさせて真実を開示すれば、彼らは幻の城（「乾闥婆城」）からめざめ、真実の宝処（サトリ）におもむく。草木でも成仏するまして人間が成仏しないわけがない。みだりに不完全な教え（小乗）に固執すれば、損となることが多い。「汗字」のほんとうの意味を、このように知るべきである。

【付記】

次いで、声聞・縁覚の二乗について、小乗の「損滅」と密教の立場からの「汗字」の実義が説かれた。上座部が説く「灰身滅智」などは「損滅」の典型である。「みだりに不完全な教え（小乗）に固執すれば、損となることが多い」と言っている。

【原文】

正因所生 報果色身 萬德莊嚴 四智圓滿 但有相續 非是凝然 生者必滅 一向記故 此是權劍 能殺能害  
本有三密 如日麗天 如空四智 似金埋地 猛風之因 利鏤之縁 誰能生之 誰能造之 汚字實義 當如是知

【書き下し】

正因所生 報果の色身しきしん 萬徳莊嚴し 四智圓滿するも 但だ相續有つて 是れ凝然に非らず 生ずる者必ず滅す 一向記の故に 此れは是れ權劍ごんけんとして 能く殺し能く害す 本有の三密は 日の天に麗しきの如く 如空の四智は 金を地に埋むるに似たり 猛風の因 利鑿りかくの縁 誰か能く之を生じ 誰か能く之を造る 汗字の實義 當に是くの如く知るべし

【註記】

- ① 正因…伝統教学（小田慈舟博士）に倣い「無漏の種子」にとる。
- ② 報果の色身…長い修行の報いとしての報身。四智を具する自受用身。
- ③ 凝然…じつと動かないこと。
- ④ 一向記…どんな經典にも決つてそう記されている。
- ⑤ 權劍…仮の劍。仮の教え。
- ⑥ 如空の四智…(大日) 如来の四智。
- ⑦ 利鑿…鋭利な鋏。

【私訳】

唯識が説く無漏の種子から生じた 長い修行の報いとしての人間の姿・かたちからなる仏身(有為法)は あらゆる仏徳で身がかざされ 「大円鏡智」「平等性智」「妙觀察智」「成所作智」の「四智」を具しているが ただその在り様が續くだけ

で 不動ではない 生ずる者は必ず滅す 唯識の論書にも決つてそう記されているからである 生者必滅は仮の教えとしてよく凡夫衆生を殺しよく危害を与える (密教が言う) 誰もが本来具有している三密は 太陽が天空に輝くのと同じく 如来の四智は 金を地に埋めてもかがやいているのに似ている 猛烈な風の因も 鋭利な鋏の縁も 誰がよくこれを生じさせ造ることができるとのか 「汗字」のほんとうの意味を まさにこのように知るべきである

【付記】

次いで、唯識(法相)の教理の「損減」と、密教の立場からの「汗字」の実義が説かれた。

【原文】

眞如法性 心之實常 凡有心者 誰無此理 心智即理 非心外理 心理是一 濕鑿豈別 如性等遍 心行狭劣  
權誘嬰兒 迷者不知 揮此權戟 破彼眞佛 是名損減 常遍本佛 不損不虧 汗字實義 汝等應知

【書き下し】

眞如法性ほんじょうは 心の實常じつじょうなり 凡そ心有る者 誰か此の理無からん 心智は即ち理なり 心外しんげの理に非ず 心と理は是れ一なり 濕かぬと鑿かぬと豈かぬに別ならん 如性等しく遍ずるも 心行狭劣きょうれつなり 權かりに嬰兒を誘うに 迷者は知らず 此の權戟ごんげきを揮

つて 彼の眞佛を破す 是れを損減と名づく 常遍の本佛は 損せず虧きせず 汗字の實義 汝等應に知るべし

【註記】

- ①眞如法性・法爾自然の眞実。
- ②實常・眞実常住。
- ③濕・濕氣。転じて澄む水、さまざまなるものを映す喩え。
- ④鑒・鏡。鏡がさまざまなるものを映す喩え。
- ⑤心行・心のはたらき。
- ⑥狭劣・狭く劣っている。転じて否定が多いこと。
- ⑦權戟・仮の枝刃のついたホコ。中觀派の論理。
- ⑧虧・欠け落ちること。

【私訳】

法爾自然の眞実（眞如法性）は 心に眞実世界として常住している およそ心をもつ者で この道理を持たない人はいない  
心と（法爾自然の）智とは道理そのものである 心の外の道理ではない 心と道理は一如である さまざまなるものを映す喩  
えとしての濕氣（澄む水）と鏡とどうして別であろうか 眞如性（仏性）は誰でも等しく具有しているが 心のはたらきが  
狭く劣っている（否定が多い） 仮に幼子を誘うのに 迷う者（中觀・三論）はその方法を知らない 自らの枝刃のついた  
仮のホコ（中觀）をふるって 本有の仏性まで破壊（論破）してしまふ これを損減と言う（密教が言う）常に法界に遍  
満している大日如来は 損傷することもなく欠け落ちることもない 「汗字」のほんとうの意味を あなた方はまさを知る  
べきである

【付記】

次に、中観（三論）の否定の論理の「損減」と、密教の立場からの「汗字」の実義が説かれた。

【原文】

水外無波　心内即境　草木無佛　波則無濕　彼有此無　非權而誰　遮有立無　是損是減　損減利斧　常斫佛性　雖然本佛  
無損無減

【書き下し】

水の外に波無し　心の内は即ち境なり　草木に佛無くば　波に則ち濕無し　彼に有つて此れに無くば　權に非ずして誰ぞ  
有を遮して無を立てれば　是れ損是れ減なり　損減の利斧りふは　常に佛性を斫く　然りと雖も本佛は　損も無く減も無し

【註記】

①草木…山川草木悉皆成仏。

①權…通常は仮の方便といったみであるが、ここは『訳注 卍字義釈』（松長有慶博士）に倣つて「偽物」ととる。

②有を遮して無を立て…中観派否定の論理。

【私訳】

水がないところに波は起らない　空性である心の中も認識対象（境）である（と中観（三論）は言う）　（唯識（法相）は）  
草木には仏性はないと言うが　波に湿気がないと言っているのと同じである　人に仏性があつて草木には仏性がないとなら  
それはニセの仮説でなくて誰の説か　有を否定して無を肯定すれば　それは損傷であり減少である　（密教の立場で言えば）

「損減」の鋭利な斧は 常に仏性をくたくが 大日如来は 損傷もなく減少もない

【付記】

中観（三論）と唯識（法相）に対する追加の「損減」不可得である。

【原文】

三諦圓涉 十世無礙 三種世間 皆是佛體 四種曼荼 即是眞佛 汚字實義 應如是學

【書き下し】

三諦圓涉さんたいえんしやうにして 十世無礙なり 三種世間は 皆是れ佛體なり 四種曼荼は 即ち是れ眞佛なり 汚字の實義 應に是くの如く學ぶべし

【註記】

①三諦圓涉：天台の三諦円融。中観派の祖龍樹の『中論』に説かれる「空・仮・中の三諦」が即空即仮即中と融合し合つて諸法の眞実相を明かしているという主張。「空諦」は、一切諸法は無自性・空だという眞実。「仮諦」は、一切諸法は縁起によつて生じる仮の存在（仮設）だという眞実。「中諦」は、一切諸法は無自性・空の故に「有」でもなく「無」でもなく「中」だという眞実。

②十世：十世間。過去・現在・未来の三世に各々三世があり、それをすべて総合する世間を加えて十世間（『訳注 卍字義釈』（松長有慶博士））。

③三種世間…衆生世間・国土世間・五蘊世間。

④四種曼荼羅…四種曼荼羅。大(絵図) 曼荼羅・三昧耶(象徴) 曼荼羅・法(種子) 曼荼羅・羯磨(木造・鑄造) 曼荼羅。

【私訳】

(天台では)「空・仮・中の三諦」は融合し合い (華嚴では)過去・現在・未来などの十の世間は妨げがなく 衆生(人間)・国土(生物)・五蘊(人や生きもの以外)の三種の世間は みな盧舎那仏の仏身である (密教では)「大」「三昧耶」「法」「羯磨」の「四種曼荼羅」は 大日如来の仏身である 「汗字」のほんとうの意味を まさにこのように学ぶべきである

【付記】

天台と華嚴の教理の「損減」と、密教の立場からの「汗字」の実義が説かれた。

【原文】

二乗智劣 爲説六識 大乘稍勝 乃示八九 執滯不進 奚知無數 不解密意 得小爲足 不識已有 貧莫過此 塵刹海會 卽是我寶 汚字實義 當如是學

【書き下し】

二乗の智、劣なれば 爲に六識を説く 大乘稍勝るも 乃ち八九を示す 執滯して進まず 奚んが無數を知らん 密意を解せず 小を得て足れりと爲す 己の有なるを識らず 貧なること此れに過ぎたるはなし 塵刹の海會は 卽ち是れ我が寶な

り 汗字の實義 當に是くの如く學ぶべし

【註記】

- ①六識：眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識。
- ②八九：六識・第七識の末那識にアーラヤ識（第八識）と阿摩羅識（第九識）を加えた意味。
- ③執滯：執着。
- ④無數：無數の識。
- ⑤塵刹：塵の数ほどの無數の仏国土。
- ⑥海會：仏尊の集合。

【私訳】

声聞・縁覺の二乗の智慧は、劣っているので 彼らに眼識などの六識が説かれた 大乘はやや勝って 第八識（アーラヤ識）と第九識（阿摩羅識）まで説いたが それに執着してそれ以上は進まず どうして無數の識があるのを知らないのか 密教の深い意味を理解せず 浅い理解でこと足れりとする 已に無數の心作用があることに気がつかず 理解が貧困なことこれに過ぎたるはない 塵の数ほどの無數の仏国土の仏尊の集合は わが心の宝である 「汗字」のほんとうの意味を まさにこのように學ぶべし

【付記】

仏教一般の心作用（識）の「損減」と、密教の立場からの「汗字」の實義が説かれた。

【原文】

同一多如 多故如如 理理無數 智智無邊 恒沙非喻 刹塵猶小 雨足雖多 並是一水 燈光非一 冥然同體 色心無量  
實相無邊 心王心數 主伴無盡 互相涉入 帝珠錠光 重重難思 各具五智 多而不異 不異而多 故名一如 一非一一  
無數爲一 如非如常 同同相似 不說此理 即是隨轉 無盡寶藏 因之耗竭 無量寶車 於此消盡 謂之損減 地墨四身  
山毫三密 本自圓滿 凝然不變 汚字實義 斯之謂歟

【書き下し】

同じく一多は如なり 多の故に如如なり 理理無數なり 智智無邊なり 恒沙ごうしゃも喩えに非ず 刹塵すくなも猶お小なし 雨足うそく多  
しと雖ども 並びに是れ一水なり 燈光一に非ざるも 冥然みょうぜんとして同體なり 色心無量にして 實相無邊なり 心王しんのうと  
心數しんじゆ 主伴無盡なり 互いに相渉入し 帝珠錠光たいしゆじようこうの如し 重重にして思い難し 各々五智を具す 多にして異らず 異ら  
ずして多なり 故に一如と名づく 一は非一に非ずして一なり 無數を一と爲す 如は如に非ずして常なり 同同相似たり  
此の理を説かざるは 即ち是れ隨轉なり 無盡の寶藏 之に因つて耗竭ひやくかくし 無量の寶車 此に於いて消盡す 之を損減と謂  
う 地墨ぢもくの四身 山毫さんしやうの三密 本自り圓滿して 凝然として不變なり 汚字の實義 斯この謂いか

【註記】

- ① 一多…華嚴が説く一即多・多即一の一如。密教で言えば、生仏不二などの二爾不二。
- ② 恒沙…ガンジス川の砂の数。
- ③ 刹塵…仏国土を塵として見ること。
- ④ 雨足…あまあし。
- ⑤ 冥然…ほの暗いこと。
- ⑥ 心王心数…六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）と末那識・アーラヤ識・庵摩羅識の九識が「心王」。そのほかの心作用が「心数」。
- ⑦ 帝珠…帝釈天の宮殿に飾られている宝石をちりばめた網の宝石。インドラ・ジャアラ。
- ⑧ 錠光…宝石の粒の光。
- ⑨ 五智…法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智。
- ⑩ 常…不変の道理。
- ⑪ 隨轉…聞く人の根機に随つて法を説く人（顕教）。
- ⑫ 耗竭…減つてなくなる。
- ⑬ 地墨…『法華経』「化城喩品」第七に説かれる比喩で、三千大千世界の地をすりつぶしてその粒子を墨にし、それを千の国土を通り過ぎたら（千年に一度）一滴下に落す。墨滴がなくなるまでの無数の比喩。
- ⑭ 四身…自性身・受用身・変化身・等流身。
- ⑮ 山毫…『華嚴経』「入法界品」に説かれる比喩で、須弥山をいくつも集め、それらをつぶして作った筆。無尽の比喩。

【私訳】

同様に、（華嚴が説く）一と多（一即多・多即一）で一如（二爾不二）である。多であるから一如のまた一如である。理の

また理は無数であり 智のまた智も無辺である ガンジス川の砂の数も喩えにはならない 仏国土を塵としても少ないくらいである 降りしきる雨の量も多いと言つても 同様に一滴の水である 灯火の光も一筋だけでなく周囲を照らすほどの暗いなかの一筋の光に過ぎない 認識の対象となる物質的なものも認識主体の心も無量であり 諸法の真実のすがたも無辺である 六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）と末那識・アーラヤ識・庵摩羅識の九識（「心王」とその他の心作用（「心数」）は 主と伴の關係にあつて尽きることがない 相互に渉入し合い 帝釈天の宮殿に飾られている寶石網の寶石の粒の光のようである 重なり合つてその数を考えることができない（また）心王と心数は各々、法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智の「五智」を具有している 多であつて異なるものではなく 異なるものではなくて多である だから一如と言ふ 一はただの一ではなく一であり 無数の多であつて多即一である

如とは、「如し」ではなく不変の道理という意味である 同一同様で相似である この道理を説かないのは 聞く人の根機に随つて法を説く人（顕教）である。無尽蔵の法の宝庫は これによつて法宝は減つてなくなり 無量の宝を運ぶ車（宝車）も 消えてなくなる これを損減と言ふ（密教は）三千大千世界の地をすりつぶしてその粒子を墨にし、それを千の国土を通り過ぎたら（千年に一度）一滴筆から落し、墨がなくなるまでの一滴（『法華経』・顕教）のような無数の仏身をまとめ た自性身・受用身・変化身・等流身の「四身」は 須弥山をいくつも集め、それらをつぶして作つた筆のように無尽の「三密」が 本初から相即相入して 確固として不変である 「汗字」のほんとうの意味を このように言ふべきである

#### 【付記】

引き続き「汗字」門について、凡夫・衆生く小乗部派く大乘といった顕教の相對二律の教理には「損減」があるのに対し、密教が説く二律の相對を超えた一如（二而不二）の立場には「損減」がない、それが「汗字」のほんとうの意味（実義）だと述べている。

◇摩字

【原文】

第四摩字實義者。所謂摩字門一切諸法吾我不可得故。是名實義。

【書き下し】

第四に摩字の實義とは、謂わゆる摩字門、一切諸法吾我不可得の故に、是れを實義と名づく。

【註記】

①摩字門・「摩字 𑖀」の字相と字義。サンスクリットの「アートルマン anan」からとった「マ 𑖀」を自相とし、その意味である「自我」「我」を字義とする。

【私訳】

第四に「摩字 𑖀」のほんとうの意味というのは、(密教で言う)「摩字」の字相や字義において、一切の諸法は「吾我」(我・自性)がないことからして、これをほんとうの意味だと言う。

【原文】

所謂我有二種。一人我。二法我。人謂四種法身。法謂一切諸法。從一法界一眞如一菩提。乃至八萬四千不可說不可說微塵數法是。如是四種法身雖其數無量。而體則一相一味無此無彼。既無彼此寧有吾我。是則遮情實義。

【書き下し】

謂わゆる我に二種有り。一に人我、二に法我なり。人とは謂わく四種法身、法とは謂わく一切諸法なり。一法界・一眞如・一菩提従り、乃至八萬四千の不可説不可説の微塵數の法、是れなり。是くの如く四種法身、其の數無量なりと雖も、體は則ち一相一味にして此れ無く彼も無し。既に彼れ此れ無し、寧ろ吾我有らんや。是れ則ち遮情の實義なり。

【註記】

①八萬四千…無數の。

②遮情…否定。

③一相一味…大日如来の唯一絶対の姿。四種法身はそれぞれ同じ味わい。

【私訳】

仏教一般で説く「我」に二通りある。一つは人我（自我・個我）、もう一つは法我（一切諸法の自性）である。（密教では）人とは自性身・受用身・変化身・等流身の「四種法身」を言い、法とは一切の諸法を言う。唯一の眞実世界・唯一の眞実・唯一のサトリから言い尽せないほどの無數に至るまでの法がある。このように、「四種法身」はその数がはかり知れないが、その本体は唯一の大日如来というお姿をしていて同じ持ち味であり、彼もこれもちがいはない（不二である）。（不二なのに）どうして（相対的な）「吾我」があるだろうか。これが「遮情」（否定的な面で）の（「麼字」の）ほんとうの意味である。

【原文】

此處則金剛已還四種行人等。希兮夷今如聾如盲。絶之又絶遠之又遠。四句不及六通亦極。是名絶言之實義。

【書き下し】

此の處は則ち金剛已還こんじつげんの四種の行人等、希兮かな。夷いなる今、聾いの如く盲の如し。絶の又絶、遠の又遠なり。四句も及ばず、六通また極まる。是れを絶言の實義と名づく。

【註記】

①處…境地。

②金剛已還…伝統教学によれば、『釈摩訶衍論』卷二に説かれ、菩薩の五十二位の「十信」・「十住」・「十行」・「十廻向」(「三賢」)。「十地」のうちの「九地」・「因滿」までの四位。あるいは、法相・三論・天台・華嚴をさす(『訳注 卍字義釈』松長有慶博士)。

③夷…蛮族がいるところ。

④四句…有・無・亦有亦無・非有非無。

⑤六通…六神通。神足通・天耳通・他心通・宿命通・天眼通・漏尽通。

【私訳】

この境地は、「十信」・「十住」・「十行」・「十廻向」(「三賢」)・「十地」のうちの「九地」・「因滿」の四段階にある(五十二位の)下位の菩薩には稀有なことである。夷のように遠隔の地で今、耳や目が不自由な人と同じである。途絶の上に途絶、遠い上に遠い。「有」「無」「亦有亦無」「非有非無」の「四句」でも言い切れず、「神足」「天耳」「他心」「宿命」「天眼」「漏尽」の「六神通」でも不可能である。これを「絶言」のほんとうの意味と言ふ。

【原文】

經云。摩字者大日之種子。一切世間雖計我而未證實義。唯有大日如來於無我中得大我也。心王如來既至如是地。塵數難思心所眷屬誰不得此大我之身。是則表德之實義。

【書き下し】

經に云わく、「摩字とは大日の種子なり」と。一切世間は我我を計すと雖も、未だ實義を證せず。唯だ大日如來有つて無我の中に於いて大我を得たるなり。心王如來既に是くの如き地に至る。塵數難思の心所眷屬、誰か此の大我の身を得ざらんや。是れ則ち表德の實義なり。

【註記】

- ① 經に云わく、「摩字とは大日の種子なり」…この「經」とは何か、伝統教学において不明である。また、大日如來の種字は「摩字」ではない。古來諸説あるなかで、曇寂の「大日を摩訶毘盧遮那とし、「摩訶」の「摩」を「摩字」と言った」という説（『訳注 卍字義釈』）はうなずける。私は、不動明王が大日如來の「教令輪身」（化身）だという意味にとる。
- ② 我我…人我と法我。
- ③ 大我…真如。
- ④ 心王…ここは、大日如來の仏徳としての真如心の王。
- ⑤ 心所…ここは、大日如來の真如心のはたらき。

【私訳】

ある密教經典に言う、「摩字とは大日の種子である」と。世間ではみな人我・法我にこだわっているが、まだほんとうの意味をわかっていない。ただ大日如來のみ「無我」のなかに相對を超えた眞實の世界を証得しているのである。眞如心の王たる大日如來はすでにこのような境地に至っている。考えることさえ難しい塵の数ほどの心のはたらきや随伴する者に、この相對を超えた眞實の世界の仏身を得ない者がいるだろうか。これが「表徳」のほんとうの意味である。

【原文】

經云。是摩字化身義者。所謂化者化用化作義遮那如來自受用故化作種種神變現無量身雲興無邊妙土義是名妙用難思之實義。

【書き下し】

經に云わく。「是の摩字は化身の義なり」とは、謂わゆる化は、化用・化作の義、遮那如來の自受用の故に、種々の神變を化作して無量の身雲を現じ、無邊の妙土を興す義なり。是れを妙用難思の實義と名づく。

【註記】

- ①經…『守護國界主陀羅尼經』卷九。
- ②化身…大日如來の他受用身・變化身・等流身。
- ③化用…他受用身・變化身・等流身が、さまざまの姿になって顯われ凡夫・衆生を濟度すること。
- ④化作…化現。右に同じ。

【私訳】

『守護国界主陀羅尼經』に「この摩字は化身の意味である」と言っているが、化とは、他受用身・變化身・等流身がさまざまに姿になって顕われ、凡夫・衆生を濟度する化用・化作の意味で、大日如來の自らのサトリを自受法樂のために自ら説法する「自受用身」であるから、さまざまにすがたを変えてはかりしれない数の仏身の集りを現出し、限りない仏国土を興す意味である。これを「妙用難思」のほんとうの意味と言う。

【原文】

又云。此摩字者三昧耶自在義無所不遍義者。言三昧耶者唐言等持。等者平等持者攝持。法身三密入纖芥而不迕。互大虚而不寬。不簡瓦石草木不擇人天鬼畜。何處不遍何物不攝。故名等持。是名平等之實義。

【書き下し】

又、『大日經』「具緣品」に云わく、「此の摩字とは三昧耶、自在の義なり」と。無所不遍の義なり。三昧耶と言うは唐には等持と言う。等とは平等、持とは攝持、法身の三密は纖芥せんかいに入れども迕せほまらず、大虚に亘れども寬えらからず、瓦石草木を簡えらばず人天鬼畜を擇ばず、何れの處にか遍せず、何れの物にか攝せざらん。故に等持と名づく。是れを平等の實義と名づく。

【註記】

①纖芥…微細なゴミ。ごく小さなこと。

②攝持…保持。

【私訳】

又、『大日経』「具緣品」に「この塵字とは三昧耶、自在の意味である」と言っているが、『大日経疏』に言う「遍満しない所はない」という意味である。三昧耶（サマヤ *samaya*）は漢訳して「等持」と言う。「等」は平等、「持」は保持、法身大日の「三密」は、微細な塵ゴミのなかにも入っても狭まるわけでもなく、虚空を巡りめぐっても広いわけでもない。ガレキや草木を喜ぶわけでもなく、人界・天界・鬼界を選ばず、どこかに遍在するわけでもなく、どんなものでも保持しないものはない。だから「等持」と言い、これを「平等」のほんとうの意味と言う。

【原文】

又云。塵字轉聲名瞞。即是妙徳之一字眞言。是圓滿具足之義。言文殊童身者四徳中之我波羅蜜。無智而不妙無徳而不圓。二美具足四辯澄湛。即是圓徳之實義。

【書き下し】

又、『大日経疏』卷十に云わく、「塵字轉聲して瞞まへと名づく」と。即ち是れ妙徳の一字眞言、是れ圓滿具足の義なり。文殊童身と言うは、四徳の中の我波羅蜜なり。智にして妙ならざること無く、徳にして圓ならざること無し。二美具足し、四辯澄湛なり。即ち是れ圓徳の實義なり。

【註記】

①瞞：「**ま**man」。文字菩薩の種字（一字眞言）。

②四徳：常・樂・我・淨。

③四辨・四無礙弁、四無礙智。「法無礙弁」「義無礙弁」「辭無礙弁」「樂說無礙弁」。

【私訳】

又、『大日経疏』卷十に言う、「摩字 マ」に悉曇で言う空点（・）をつけると「瞞 man」と言う」と。これは妙徳菩薩、すなわち文殊師利菩薩の一字真言であり、「円満具足」の意味である。文殊菩薩とは、常・樂・我・淨の四徳の我波羅蜜である。智慧は深妙であり徳は円満である。智と徳二つの美点を具有し、説法の「法無礙弁」「義無礙弁」「辭無礙弁」「樂說無礙弁」の「四辯」は無垢清淨を湛えている。これが「円徳」のほんとうの意味である。

【原文】

又云。摩字第十一轉名輪。此是不動尊之心也。此尊者三世十方一切諸佛之祖師。四十二地一切菩薩之所尊。雖然現使者之眇相示奴僕之垂髮。屈已成之尊位澆初心之遺穢。是則高而不奢損而招盈。即是損已益物之實義。

【書き下し】

又、『大日経疏』に云わく、「摩字第十一の轉を輪まんと名づく」と。此れは是れ不動尊の心なり。此の尊者は三世十方の一切諸佛の祖師、四十二地の一切菩薩の所尊なり。然りと雖も、使者の眇相みょうそうを現じて奴僕ぬぼくの垂髮しゆはつを示し、已成の尊位を屈して初心の遺穢いゑさんを澆せんす。是れ則ち高くして奢らず、損して盈ようを招く。即ち是れ損已益物の實義なり。

【註記】

① 輪：「マム・𑖀<sub>nani</sub>」。不動明王の「真言」のうまくさまんだばざらだんせんだまかろしやだそわたやうんたらたかんまん」の「まん」。

② 心：一字真言。

③ 四十二地：菩薩の五十二位のうち、最初の「十信」をのぞく「十住」「十行」「十廻向」「十地」「等覺」「妙覺」。

④ 使者：大日如来の使者（教令輪身）。

⑤ 眇相：左目を半分閉じた形相。

⑥ 垂髮：髮の毛をおさげにして左耳の方にたらす。

⑦ 初心：行をはじめて間もない修行者。

⑧ 遺穢：汚れた残飯。

⑨ 眇相：片目を閉じる。不動明王は右目を開き左目を半眼にする。

⑩ 垂髮：弁髪をたらす。不動明王は弁髪を左側にたらす。慈悲の心をたれる。

【私訳】

又、『大日経疏』卷十に）言う、「摩字 𑖀マ」と字母第十一番目の「𑖀アム」で「𑖀輪（マム）」と。これは、不動明王の一字真言である。この尊者は、三世十方の一切の諸仏の祖師であり、「十信」以外の四十二地にある一切の菩薩の尊崇の的である。そうでありながら、（大日如来の）召し使いのように左目を半ば閉じた顔たちをし、下僕のように弁髪を左耳にたらし、すでに成し遂げている仏の地位を曲げてまで行をはじめて間もない修行者の汚れた残飯を食べる。すなわち高くして奢らず、損して満ちる。これが「損己益物」のほんとうの意味である。

【原文】

若入摩字之吾我門。攝之諸法無一一法而不該。故經云。我則法界。我則法身。我則大日如來。我則金剛薩埵。我則一切佛。我則一切菩薩。我則緣覺。我則聲聞。我則大自在天。我則梵天。我則帝釋。乃至我則天龍鬼神八部衆等。一切有情非情無不摩字。是則一而能多小而含大。故名圓融之實義

【書き下し】

若し摩字の吾我門に入らば、之に諸法を攝するに、一一の法にして該かねざること無し。故に經に云わく、「我則ち法界、我則ち法身、我則ち大日如來、我則ち金剛薩埵、我則ち一切佛、我則ち一切菩薩、我則ち緣覺、我則ち聲聞、我則ち大自在天、我則ち梵天、我則ち帝釋、乃至、我則ち天龍鬼神八部衆等なり。一切の有情非情、摩字ならざること無し。是れ則ち一にして能く多なり、小にして大を含む」と。故に圓融の實義と名づく。

【註記】

- ①吾我…大我。真如。古來、傳統教学に諸説あり。
- ②我則ち法界…これにも古來、傳統教学に諸説あり。

【私訳】

もし、「摩字」の「大我」の境地に入つて言うなら、「摩字」に諸法を包摂して、一つ一つ含まれないものはない。だから、經に言っている、「我れは法界、我れはすなわち法身、我れは大日如來、我れは金剛薩埵、我れは一切の仏、我れは一切の菩薩、我れは緣覺、我れは聲聞、我れは大自在天、我れは梵天、我れは帝釈天、さらに我れはすなわち天龍・鬼神・八部衆な

どである。あらゆる有情・非情は、「魔字」に含まれないものはない。すなわち、一であつて多であり、小であるが大を含むのである」と。だから「円融」のほんとうの意味と言つ。

■「吽字」の総合釈

◆四字・四身

【原文】

次合釋者。此吽以四字成一字。所謂四字者阿訶汚魔。阿法身義。訶報身義。汚應身義。魔化身義。舉此四種攝彼諸法無不括。

【書き下し】

次に、合釋とは、此の吽、四字を以つて一字を成す。謂わゆる、四字とは、阿・訶・汗・魔なり。阿は法身の義、訶は報身の義、汗は應身の義、魔は化身の義なり。此の四種を擧げて彼の諸法を攝するに括らざるもの無し。

【註記】

①四種：仏教で一般的に説く「法身」「報身」「応身」「化身」の四種身。これを伝統教学では「自性身」「受用身」「變化身」「等流身」の四種法身と解釈する。

【私訳】

次に、「吽字」の總体的な解釈を説くのであるが、(改めて言えば)この「吽・~~ん~~」は、四字で一語を構成している。四字とは「~~ん~~」「~~ん~~」「~~ん~~」「~~ん~~」「~~ん~~」「~~ん~~」、すなわち「阿字」「訶字」「汗字」「魔字」である。「阿字」は法身、「訶字」は報身、「汗字」は

應身、「摩字」は化身の意味である。この四種の仏身に一切の諸法を内包するのにくくらないものはない。

◆個別の相

【原文】

且以別相言。以阿字門攝一切眞如法界法性實際等理無所不攝。以訶字門攝一切内外大小權實顯密等教無所不攝。以汚字門攝一切行三乘五乘等行無所不攝。以摩字門攝一切果法無所不攝。理理盡持事事悉攝。故名總持。

【書き下し】

且つ、別相を以つて言わば、

阿字門を以つて一切の眞如・法界・法性・實際等の理を攝するに、攝せざる所無し。

訶字門を以つて一切の内外・大小・權實・顯密等の教を攝するに、攝せざる所無し。

汚字門を以つて一切の行・三乘・五乘等の行を攝するに、攝せざる所無し。

摩字門を以つて一切の果法を攝するに、攝せざる所無し。

理理盡く持し事事悉く攝す。故に總持と名づく。

【註記】

①別相…「阿字」「訶字」「汚字」「摩字」それぞれの字相。

②實際…眞實際。眞実世界（法界）の極致。

③内外…内は仏教、外は外道・外教。

④大小…大乘と小乗。

⑤權實…權京と実教。權は仮の教え・方便、實は根本の教え。

⑥五乘…人乗・天乗・声聞乘・緣覺乘・菩薩乘。

⑦果法…修行の報い（成果）としての教法。

⑧理理・事事…法界の自然法爾の道理と實際。

### 【私訳】

さらに、「ふ」「力」「ふ」「力」「すなわち「阿字」「訶字」「汗字」「麼字」のそれぞれを字相で言えば、

「阿字」（本不生）の門は、一切の真如・法界・法性・真實際などの道理を内包していて、含まないものはない。

「訶字」（因縁）の門は、一切の内（仏教）外（外道）・大（大乘）小（小乗）・權（權教・方便）実（実教・根本の教え）・頭（頭教）密（密教）などの教えを内包していて、含まないものはない。

「汗字」（損減）の門は、一切の仏教その他の修行・三乘（声聞・緣覺・菩薩）の修行・五乘（三乘に人・天の二乗）などの修行を内包していて、含まないものはない。

「麼字」（果）の門は、一切の修行の報果を内包していて、含まないものはない。

理という理をすべて内包し、事という事をことごとく具有している。だから「総持」と言う。

### ◆共通の相

#### 【原文】

若以通相釋。各各攝理教行果等。無所不攝無所不盡。猶如因陀羅宗一切義利悉皆成就。又如伏羲六爻一一爻中各具萬像。

【書き下し】

若し通相を以って釋さば、各各理・教・行・果等を攝す。攝せざる所無く、盡さざる所無し。猶お因陀羅宗の如く一切の義利悉く皆成就す。又、伏羲の六爻の二一の爻の中に各々萬像を具するが如し。

【註記】

- ①理：「阿字」に内包される、一切の真如・法界・法性・真實際。
- ②教：「訶字」に内包される、一切の内（仏教）外（外道）・大（大乘）小（小乘）・権（権教・方便）実（実教・根本の教え）・頭（頭教）密（密教）。
- ③行：「汗字」に内包される、一切の仏教その他の修行・三乘（声聞・縁覚・菩薩）の修行・五乘（三乘に人・天の二乗）の修行。
- ④果：「麼字」に内包される、一切の修行の報果。
- ⑤因陀羅宗：因陀羅＝ヒンドウの勇猛神インドラ、仏教の護法神となった帝釈天が文法書『声明論』を作り、その一字一句にあらゆる真実義を含ませた、という故事。
- ⑥義利：言葉の意味とその益するところ。
- ⑦伏羲の六爻：中国の神話に登場する聖帝伏羲は、背中に八卦を背負う亀を手に入れ「八卦圖」を作ったという故事。爻は八卦を表わす横画記号。これに天・人・地があり、その各々に陰陽があつて六爻。

【私訳】

または、共通の観点から解釈すれば、（四字の）各々に理・教・行・果などを具有する。含まないものはなく、含まれないも

のもない。ちよつど帝釈天が文法書『声明論』を作つて、その一字一句にあらゆる真実義を含ませたのと同じく、(理・教・行・果は)一切の字義とその益するところがことごとく成就している。これはまた、中国の神話に登場する伏羲が背中に八卦を背負う亀を入手し八卦図を作つた故事があるが、その八卦を表わす横画記号「爻」に天・人・地があり、その各々に陰陽があつて六爻、その一つ一つに万象を具有するのと同じである。

◆字相

【原文】

復次此吽字中有詞字是因。因緣所生法。於此法中諸外道二乘及大乘教等教網紛紜。各舉旗鼓爭稱僞帝。若外道若二乘若大乘。執有人有法有因有果有常有我。是等皆是麼字點中攝。即是增益邊未得中道。若執無人無法無因無果無常無我等。即是汗字點中攝。即是損減邊。亦未會中道。若執非空非有非常非斷非一非異等。阿字中非義中攝。若執不生不滅不增不減等八不等。又阿字中不義中攝。又若執無色無形無言無說等。亦阿字中無義中攝。亦未會眞實義。並是遮情之邊。

【書き下し】

復た次に、此の吽字の中に詞字有り、是れ因なり。因緣所生の法なり。此の法の中に於いて諸々の外道・二乗及び大乘教等教網紛紜し、各々旗鼓を擧げて争い僞帝と稱す。若し外道、若し二乘、若し大乘、有人・有法・有因・有果・有常・有我を執る。是ら等は皆、是れ麼字の點の中に攝す。即ち是れ増益の邊にして未だ中道を得ず。若し無人・無法・無因・無果・無常・無我等を執らば、即ち是れ汗字の點の中に攝す。即ち是れ損減の邊にして、亦た未だ中道に會かなわず。若し非空・非有・非常・非斷・非一・非異等を執らば、阿字の中の非の義の中に攝す。若し不生・不滅・不増・不減等の八不等を執らば、又、阿字の中の不の義の中に攝す。又、若し無色・無形・無言・無說等を執らば、亦た阿字の中の無義の中に攝す。亦た未だ眞

實義に會わず。並びに是れ遮情の邊なり。

【註記】

- ①教網…教理の網。教線。
- ②紛紜…転がりみだれること。
- ③旗鼓…旗や太鼓。
- ④增益…迷妄を増やす、の意。
- ⑤無義…無という意味、無のニュアンス。

【私記】

また次に、この「吽字・**𑖀**」のなかに「訶字・**𑖅**」があり、これは「因」という意味のサンスクリット「**hetu**」の基語である。あらゆるものはすべて因縁によって生じる（因縁所生の法）ということである。この諸法のなかに、諸々の外道・二乗（声聞・縁覚）及び大乘の教理の網が広がり乱れ、各々主張の旗を挙げ太鼓を打って争い、ニセの帝王だと言う。もし外道にしても、二乗（声聞・縁覚）にしても、大乘にしても、人法・因果・常・我に執着する人がいる。これらはみな、「塵字」の空点のなかに含まれる。これは「有」にこだわって迷妄を増すばかりで、まだ中道を体得できていない。もし人法・因果・常・我等などないと執着すれば、これは「汗字」の点のなかに含まれる。これは「損減」の次元にあって、これもまた中道になつていない。もし非空・非有・非常・非斷・非一・非異に執着するならば、「阿字」の「非」の意味に含まれる。もし不生・不滅・不増・不減などの「八不」に執着するならば、阿字の「本」不（生）」の意味に含まれる。またもし、無色・無形・無言・無説に執着するならば、「阿字」の「無」の意味に含まれる。これらは真実義にかなつておらず、否定の次元である。

◆字義

【原文】

若未解諸法密號名字相眞實語如義語者、所有言說思惟修行等悉是顛倒悉是戲論。不知眞實究竟理故。故龍猛菩薩云。佛法中有二諦。一者世諦、二者第一義諦。爲世諦故說有衆生有、爲第一義諦故說無衆生所有。復有二種。爲不知名字相密號者、說第一義中無衆生、爲知名字相密號者、說第一義中有衆生。若有人能知此吽字等密號密義、則名正遍知者。所謂初發心時便成正覺、轉大法輪等、良由知此究竟實義也。

【書き下し】

若し未だ諸法の密號・名字の相・眞實語・如義語を解せざる者あつて、所有の言說・思惟・修行等、悉く是れ顛倒、悉く是れ戲論なり。眞實究竟の理を知らざるが故に。故に龍猛菩薩の云わく、「佛法の中に二諦有り。一は世諦、二は第一義諦なり。世諦爲るの故に衆生有りと説き、第一義諦爲るの故に衆生所有無しと説く」。「復た二種有り。名字相・密號を知らざる者の爲に、第一義の中に衆生無きを説き、名字相・密號を知る者の爲に、第一義の中に衆生有りを説く」。若し人有つて能く此の吽字等の密號・密義を知らば、則ち正遍知者と名づく。謂わゆる初發心時に便ち正覺を成じ、大法輪を轉ずる等は、良に此の究竟の實義を知るに由るなり。

【註記】

- ①密號…密教的な称号・名称・眞言。
- ②名字の相…眞実を表わす名称や文字の分節。
- ③眞實語…眞実のコトバ。眞言・陀羅尼。
- ④如義語…眞実を意味するコトバ眞言・陀羅尼。

⑤龍猛菩薩…インド大乘中觀派の祖師、龍樹。

⑥正遍知者…正しく広大な真実智を得た者。

【私訳】

もしまだ、諸法の密教的な称号・名称や、真実を表わす名称や文字の分節や、真実のコトバ（真言）・真実を意味するコトバ（陀羅尼）を理解しない人がいるとすれば、その人の言葉や考え方や修行などはすべて真実に対して本末転倒であり、すべからず真実性に欠ける虚構の言説である。究極の真実の道理を知らないからである。

だから、龍猛菩薩が言っている、「仏法のなかに二通りの真実態がある。一つは世諦（世俗諦）、二つは第一義諦（勝義諦）である。世俗（世間）の次元における真実の立場では衆生を説き、サトリ（出世間）の次元における真実の立場からは衆生はないと説く」と。（さらに）「また、二種あつて、真実を表わす名称や文字の分節や、密教的な称号・名称を知らない人のために、第一義諦において衆生はないと説き、真実を表わす名称や文字の分節や、密教的な称号・名称を知る人のために、第一義諦において衆生ありを説く」と。もしある人が、よくこの「吽字」など密教的な称号・名称や密教的な意味を理解するなら、彼を正しく広大な真実智を得た者と言う。すなわち、はじめて菩提心を発起した時たちまちサトリを得て、里業を他のために説くことができる人である。まさしくこの究極のほんとうの意味を知っているからである。

【原文】

復次約此一字明三乘人因行果者。先明聲聞人。次約緣覺。後明菩薩。初明聲聞者。此吽字中有詞字。即是因義。伽等云聲聞乘種性者是其因也。下有汚字。是其行也。聲聞人四諦法五停心觀七方便等此是行也。是汚字字相此其當也。今聲聞人灰身滅智以爲究竟果。此吽字上有空點。是空點者麼字所生。麼字兼人法二空義。其人空理即聲聞所證之理。是名聲聞人因行果。

【書き下し】

復た次に、此の一字に約して三乗の人の因・行・果を明かさば、先ず聲聞の人を明かし、次に縁覺に約し、後に菩薩を明かす。初めに聲聞を明かすとは、此の卍字の中に訶字有り。即ち是れ因の義なり。伽等に聲聞乗の種性を云うは、是れ其の因なり。下に汗字有り。是れ其の行なり。聲聞の人の四諦の法・五停心觀・七方便等、此れは是れ行なり。是れ汗字の字相、

此れ其れに當るなり。今、聲聞の人、灰身滅智けしんめつち以つて究竟の果と爲す。此の卍字の上に空點有り。是の空點とは磨字の所生なり。磨字は人法二空の義を兼ね、其の人空の理は即ち聲聞所證の理なり。是れを聲聞の人の因・行・果と名づく。

【註記】

- ① 因・行・果…行因と修行と行果。
- ② 伽…『瑜伽師地論』第二十一。
- ③ 種性…仏になる素質。仏種。
- ④ 四諦の法…四諦は苦・集・滅・道。この四諦を空の観点から観じる観法。
- ⑤ 五停心觀…不淨觀・慈悲觀・因縁觀・界分別觀・數息觀。
- ⑥ 七方便…凡夫・衆生の修行位。五停心觀・別相念住・總相念住の三賢位と煥法・頂法・忍法・世第一法の四善根位。
- ⑦ 灰身滅智…灰になるまで身体を燃やして煩惱をすべて消滅させる境地。上座部の最高の境地。

【私訳】

また次に、この「卍字」一字に集約されている声聞・縁覺・菩薩の三乗の行因(因)と修行と行果(果)について明かすと、

先ず声聞を明かし、次に縁覺、最後に菩薩を明かす。はじめに声聞であるが、この「吽字」のなかに「訶字」がある。すなわち「因」が字義である。『瑜伽師地論』などに声聞乘の仏になる素質を説くのは、その（声聞の）行因のことである。「訶字」の下に「汗字」（悉曇では三昧点）がある。これは（悉曇で言う）修行を意味する。声聞の「四諦」の觀法や、「五停心觀」や、「七方便」の觀法など、これが修行である。これは（どれも煩惱を「損減」する意味で）「汗字」の字相に当る。今、声聞は、「灰身滅智」を究極の行果とする。この「吽字」の上に「空点」がある。この「空点」は「麼字」の別字である。「麼字」は人法二空の意味を兼ね、そのうちの人空の道理は声聞のサトリの根拠の理である。これを声聞の因・行・果と言う。

### 【原文】

次明縁覺者。伽等所謂縁覺乘種性等是其因也。此吽字中有訶字是其因也。縁覺亦觀十二因縁四諦方便等。此吽字下有汚字是其當也。縁覺亦證人空理此其果也。准上知之。

### 【書き下し】

次に縁覺を明かさば、伽等に謂う所の縁覺乘の種性等、是れ其の因なり。此の吽字の中に訶字有り、是れ其の因なり。縁覺は亦た十二因縁・四諦・方便等を觀ず。此の吽字の下に汗字有り、是れ其れに當たる。縁覺も亦た人空の理を證す。此れ其の果なり。上に准じて之を知れ。

### 【註記】

①伽等…『瑜伽師地論』など。

【私訳】

次に、縁覚であるが、『瑜伽師地論』などに説く縁覚の仏になる素質などは、その行因である。この「吽字」に「訶字」があり、これは「因」という字義を意味する。縁覚はまた、十二因縁や四諦や七方便などを観法で観じる。この「吽字」の下に（悉曇で三昧点の）「汗字」がある、これは（悉曇で）修行に当たる。縁覚もまた（声聞と同様）人空の道理を覺っている。これはその行果である。上述の声聞に准じて理解すべきである。

【原文】

次明菩薩者。遮那經金剛頂經等說菩薩人菩提心爲因大悲爲根方便爲究竟。今此吽字本體訶字。是則一切如來菩提心以爲因也。下有三昧畫。是大悲萬行義。上有大空點。是究竟大菩提涅槃之果也。以此一字攝三乘人因行果等悉攝無餘。及以顯教一乘祕密一乘之因行等准知之。

【書き下し】

次に菩薩を明さば、遮那經・金剛頂經等に、「菩薩の人、菩提心を因と爲し、大悲を根と爲し、方便を究竟と爲す」と説く。今、此の吽字の本體は訶字なり。是れ則ち一切如來の菩提心以つて因と爲すなり。下に三昧の畫有り。是れ大悲萬行の義なり。上に大空點有り。是れ究竟大菩提涅槃の果なり。此の一字を以つて三乘の人の因・行・果等を攝するに、悉く攝して餘り無し。及び顯教一乘以つて、祕密一乘の因・行等、准じて之を知れ。

【註記】

①遮那經・『大日經』。

②菩提心を因と爲し、大悲を根と爲し、方便を究竟と爲す・『大日經』「具緣品」に説かれる「三句の法門」。

③三味の畫…悉曇の三昧点。

【私訳】

次に、菩薩であるが、『大日經』や『金剛頂經』などに、「菩薩は、菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟とする」と説かれている。今、この「吽字・」の本体は「訶字・」である。これは一切如來の菩提心を「因」とするという意味である。「吽字」の下に（悉曇の）「三昧点」の画がある。これは大悲によるあらゆる利他行の意味である。上には（悉曇の）「空点」がある。これは究極の大菩提、すなわち涅槃という行果のことである。この「吽字」一字を以って三乗の因・行・果などをことごとく包摂して余りがない。その他、顕教一乗の人も、密教一乗の人も、因・行・果などについては、上述同様を知るべきである。

◆意義

【原文】

次明以此一字通攝諸經論等所明理者。且大日經及金剛頂經所明。皆不過此菩提爲因大悲爲根方便爲究竟之三句若攝廣就略攝末歸本。則一切教義不過此三句。束此三句以爲一吽字。廣而不亂略而不漏。此則如來不思議力法然加持之所爲也。雖千經萬論。亦不出此三句一字。其一字中所開因行果等准前思之。非只吽字攝如是義。所餘一字門亦復如是。

【書き下し】

次に、此の一字を以つて、通じて諸經論等の明かす所の理を攝するを明かさば、且く大日經及び金剛頂經の明かす所、皆、此の菩提爲因・大悲爲根・方便爲究竟の三句に過ぎず、若し廣を攝して略に就き、末を攝して本に歸さば、則ち一切の教義、此の三句に過ぎず。此の三句を束ねて以つて一つの吽字と爲す。廣くして亂れず、略して漏れず。此れ則ち如來不思議の力、

法然加持の爲す所なり。千經萬論なりと雖も、亦た此の三句一字を出ず。其の一字の中に開く所の因・行・果等は前に准じて之を思え。只だ吽字に是くの如き義を攝するのみに非ず。所餘の一一の字門、亦た復た是くの如し。

### 【私訳】

次に、この「吽字」一字に、通底する諸經論の説く道理を内包することについてであるが、直言すれば、『大日経』『金剛頂経』が説く所は皆、この「菩提爲因・大悲爲根・方便爲究竟」の「三句の法門」を過ぎず、もし広大な教説を集約して簡略にし、枝葉末節を内包して根本の教理に戻したとしても、一切の教義はこの「三句の法門」を越えることはない。この「三句の法門」を束ねると、一つの「吽字」となる。広大な意味をもちながら全体が乱れず、一字に略しても意味に欠けるところがない。これは如來の神威力や法爾自然の加持力がそうなるべくしてそうさせているのである。千の經典に万の論書があると云つても、この三句・一字を出ない。その一字のなかに開示される因・行・果については、前述に准じて考えるべきである。ただ、「吽字」だけにこのような意味を含むのではない。このほかの一つ一つの字門も、またこのように解釈すべきである。

### 【付記】

宗祖大師は、『大日経』『金剛頂経』が説く所は皆、この「菩提爲因・大悲爲根・方便爲究竟」の「三句の法門」を過ぎず、と言つが、『金剛頂経』に「三句の法門」は説かれていない。

### ■「吽字」の総括

#### ◆擁護

### 【原文】

復次擁護義者。謂上有大空點是佉字門。即是大空義。即是般若佛母明妃義。中有訶字是因義。於此虛空藏中含養眞因種子。即是大護義也。

【書き下し】

復た次に、擁護おうごの義とは、謂わく上に大空點有り、是れ「佉きや字」門なり。即ち是れ大空の義なり。即ち是れ般若佛母明妃の義なり。中に訶字有り、是れ因の義なり。此の虛空藏の中に於いて眞因の種子を含養す。即ち是れ大護の義なり。

【私訳】

また次に、「吽字」に「擁護」の意味があるというのは、すなわち、「訶字くわ」の上に「空点」がある。これは「佉字くわ」門であり、「大空」の意味である。すなわち、般若佛母明妃の意味である。「吽字」のなかに「訶字」がある。これは「因」の意味である。この虛空藏のなかにサトリの眞の行因となる種子を含んで育てるのである。すなわち「大護」の意味である。

◆自在能破

【原文】

復次自在能破義者。謂上有空點即是佉字門。佉字門猶如虛空畢竟清淨無所有。即是高峯觀所知境界。中有訶字是菩提幢。亦是自在力。以此二字相應故。猶如大將能破怨敵。故名自在能破義。

【書き下し】

復た次に、自在能破の義とは、謂わく、上に空點有り、即ち是れ佉字門なり。佉字門は猶し虚空の畢竟清淨にして所有無き

が如し。即ち是れ高峯より觀て知る所の境界なり。中に訶字有り、是れ菩提の幢なり。亦た是れ自在力なり。此の二字を以つて相應するが故に、猶し大將の能く怨敵を破するが如し。故に自在能破の意味と云う

【註記】

①高峯觀…高い峰から広大な眺望を觀察する觀想。高峯觀三昧。

【私訳】

また次に、「自在能破」の意味であるが、すなわち、「吽字」の上に「空点」がある。これは「佉字孤」門である。「佉字」門はちょうど虚空が究極無垢清淨であつて何も有しないのと同じである。これは高い峰から觀想してわかる境地である。「吽字」のなかに「訶字」がある。これは「菩提」の旗じるしであり、「自在力」である。この「佉字孤」と「訶字孤」の二字が相即するから、ちょうど軍隊の大將が敵をよく摧破するのと同じである。だから「自在能破」の意味と云う

◆能滿願

【原文】

復次能滿願義者。謂訶字門是菩提心寶。與佉字門虚空藏和合故。得成巧色摩尼。能滿一切衆生希願。是曰能滿願義

【書き下し】

復た次に、能滿願の義とは、謂わく、訶字門は是れ菩提心の寶なり。佉字門の虚空藏と和合するが故に、巧色摩尼を成ずるを得て、能く一切の衆生の希願を滿たす。是れを能滿願義と曰う。

【註記】

①巧色摩尼：願いごとをかなえる美しい色の摩尼宝珠

【私訳】

また次に、「能滿願」の意味であるが、すなわち、「訶字<sup>くわ</sup>」門は「菩提心」の宝である。「佉字<sup>くわ</sup>」門は虚空藏と和合一致するから、願いごとをかなえる美しい色の「摩尼宝珠」を用いる修法を成就して、一切の衆生の願いごとをよくかなえる。これを「能滿願」の意味と言う。

◆大力

【原文】

復次大力義者。謂訶字菩提心中具足一切如來十力等。今與佉字合故。離諸繫縛無復罣礙。如虛空中風自在旋轉。故名大力。此大堅固力本從諸佛金剛種性生。又於無量劫已來。常以此訶字眞因具修法行。佉字萬徳一一皆如金剛不可破壞。是名大力義

【書き下し】

復た次に大力の義とは、謂わく、訶字の菩提心の中に一切如來の十力等を具足す。今、佉字と合するが故に、諸繫縛を離れ復た罣礙無し。虚空の中の風、自在に旋轉するが如し。故に大力と名づく。此の大堅固力は本、諸佛の金剛種性従り生ず。

又、無量劫より已來、常このかたに此の訶字の眞因を以つて具に法行を修す。佉字の萬徳、一一に皆金剛の破壊すべからざるが如し。

是れを大力の意味と名づく。

【註記】

①如來の十力…「処非処智力」「業異熟智力」「靜慮解脫等持等至智力」「根上下智力」「種種界智力」「遍趣行智力」「宿住隨念智力」「死生智力」「漏尽智力」。

②金剛種性…堅固な菩提心をもつ素質。

【私訳】

また次に、「大力」の意味であるが、すなわち、「訶字」の（字義の「因」＝「菩提心因」の）「菩提心」に一切如來の「十力」が具有されている。（「十力」は「佉字<sup>レ</sup>因」（「虚空」）と一如になるから、さまざまな束縛から離れ心の妨げもない。虚空のなかの風が、自由自在に吹きめぐると同じである。だから「大力」と言う。この絶大な堅固な力は、もともと諸仏の堅固な菩提心をもつ素質から生じる。また、無限の昔から、常にこの「訶字」の本来の「菩提心因」とともに仏法の修行を行ってきた。「佉字」の万徳、一つ一つが皆（堅固で）、金剛石が破壊できないのと同じである。これを「大力」の意味と言う。

◆恐怖

【原文】

復次恐怖義者。謂是佉字者一切如來誠實語。所謂一切諸法無因無果本來清淨圓寂義。是故纔發菩提心。即坐菩提道場轉正法輪。由此相應故能證悟一切佛法。念念具薩般若智。直至究竟坐金剛座。四魔現前則入大慈三摩地。恐怖降伏四魔等。所謂四魔者蘊煩惱魔死魔天魔。如是魔軍無不恐怖降伏。猶如日輪纔舉暗暝消退。復次如來以何法恐怖諸障耶。謂即以此佉字門也。下三昧畫即是具修萬行。上有大空點即是已成萬徳。訶字即是法幢旗。三昧空點合故即是高峯觀三昧。上點是明妃之母。下畫是胎分日増。如是義故適發聲時魔軍散壞。即是恐怖義也。

【書き下し】

復た次に、恐怖くふの義とは、謂わく、是の卍字は、一切如來の誠實じょうじつの語なり。謂わゆる一切諸法は無因無果にして、本來清淨圓寂の義なり。是の故に、纔に菩提心を發さば、即ち菩提道場に坐し、正法輪を轉ず。此の相應に由るが故に能く一切の佛法を證悟し、念念に薩般若智を具し、直に究竟に至り金剛座に坐す。四魔現前すれば則ち大慈三摩地に入り、四魔等を恐怖し降伏す。謂わゆる、四魔とは蘊魔・煩惱魔・死魔・天魔なり。是くの如くの魔軍、恐怖し降伏せざること無し。猶し日輪纔かに擧がれば暗暝消退するが如し。復た次に、如來は何なる法を以つて諸障を恐怖するや。謂わく、即ち此の卍字門を以つてするなり。下の三昧畫は即ち是れ具に萬行を修す。上に大空點有るは即ち是れ已成の萬德なり。訶字は即ち是れ法幢旗なり。三昧と空點と合するが故に即ち是れ高峯觀こうぶ三昧なり。上の點は是れ明妃の母なり。下の畫は是れ胎分日々を増す。是くの如くの義の故に、適まてに聲を發す時魔軍は散壞す。即ち是れ恐怖の義なり。

【註記】

- ① 誠實… 眞實そのもの。
- ② 圓寂… あらゆるものが妨げなく靜寂であること。
- ③ 菩提道場… 釈尊がサトリを得た菩提樹下の瞑想の場。
- ④ 正法輪… (釈尊の教えを) 説法すること。
- ⑤ 薩般若智… 一切智智。 仏智。 一切の眞實を知る智慧。

⑥金剛座・釈尊がそこでサトリを開いた堅固な座。サトリの座。

⑦四魔・煩惱(執着)魔・五蘊(苦)魔・死(恐怖)魔・天(他化自在の魔王)魔。

⑧法幢旗・仏法の旗じるし。

⑨高峯觀三昧・高い峰から眼前の広大な景色を觀じているような三昧。無量の法門、普門。

⑩明妃・大力大護明妃。

### 【私記】

また次に、「吽字」に「恐怖」の意味があるということであるが、すなわち、「吽字」は(そもそも)、一切如來の眞実そのもののコトバである。一切諸法は因も果もなく、もとより清淨であらゆるものが妨げなく静寂であるという意味である。その故に、わずかに菩提心を発起すればたちまち菩提道場に坐し、正法を説くものである。この「吽字」と一体化するから一切の仏法を覺り、念ずるたびに一切智智(仏智)を念得し、まっすぐ究極の境地に到つて堅固なサトリの座に坐るのである。

(瞑想中に)「四魔」が目の前に現われれば大慈悲の三昧に入り、四魔を恐怖させ降伏させる。四魔とは、五蘊(苦)・煩惱(執着)・死(恐怖)・天(他化自在の魔王)である。このような魔軍が恐怖し降伏しないことはないのである。ちょうど太陽がわずかに顔を出せば暗闇が消えるのと同じである。また次に、如來はどのような教えによつて心の妨げとなる諸魔を恐怖させるのであろうか、と言えば、すなわちこの「吽字」門によつてである。「吽字」下の「三昧画」は数多くの修行を行うことを意味している。「吽字」の上の「大空点」はすでに成就している数多くの仏徳のことである。「訶字」は仏法の旗じるしである。「三昧点」と「空点」とが二而不二となるから、高い峰から眼前の広大な景色を觀じているような三昧(高峯觀三昧)である。「吽字」の上の「大空点」は明妃の母(般若母)であり、下の「三昧画」は明妃の母の胎内で胎児が日々成長することを意味している。この意味で、「吽」の声を発する時魔軍は退散するのである。これが「恐怖」の意味である。

◆等観歆喜

【原文】

復次等観歆喜義者。此吽字中有訶字是歡喜義。上有大空是三昧耶。下有二昧畫字是亦三昧耶。一三昧耶中行。三世諸佛皆同此觀。故名等観義

【書き下し】

復次に、等観歆喜の義とは、此の吽字の中に訶字有り、是れ歡喜の義なり。上に大空有り、是れ三昧耶なり。下に二昧畫の字有り、是れ亦た三昧耶なり。二の三昧耶の中に行ず。三世の諸佛皆此の觀に同じ。故に等観の義と名づく。

【私訳】

また次に、「等観歆喜」の意味についてであるが、この「吽字」のなかに「訶字」がある。これは「歡喜」の意味である。「吽字」の上に「大空点」がある。これは「等同(三昧耶)」である。「吽字」の下に「三昧画」の字がある。これも「等同(三昧耶)」である。(この空点と三昧画の)二つの「等同(三昧耶)」の境地で觀法を行じるのである。三世の諸佛は皆この觀法を行じる。故に「等観」の意味と云うのである。

【付記】

『訳注 吽字義釈』(松長有慶)によれば、以上見てきた最後の

■吽字の総括

◆擁護

◆自在能破

◆能滿願

◆大力

◆恐怖

◆等觀歡喜

は、「擁護」「自在能破」「能滿願」「大力」「恐怖」が『大日經疏』卷九に説かれる大力大護明妃の真言に関する説明から引用し、最後の「等觀歡喜」は同疏の卷十一に説かれる觀自在菩薩の真言に関する「吽字」の解説からの引用だと言う。

『大日經疏』第九より当該部分

爾時世尊作如是念。我從初發意以來。常以此勇健菩提心。護持正法及與衆生。於種種難行苦行事中。猶如金剛無有退轉。正爲成就如是三昧。普護十方諸佛刹故。今我所願皆已滿足。作所應作正是其時。即時發遍一切如來法界。哀愍無餘衆生界音聲。説此持明法句。若我所言誠實不虛者。其有誦持修習。令其勢力與我無異。故名大力大護也。阿闍梨言。明是大慧光明義。妃者梵云囉逝。即是王字作女聲呼之。故傳度者義説爲妃。妃是三昧義。所謂大悲胎藏三昧也。此三昧是一切佛子之母。此佛子者。即是清淨法幢菩提心。如彼胎藏始從歌羅羅時。含藏覆護。令不爲衆緣所傷。漸次增長乃至誕育之。後猶固懃心守護而乳養之。是故説母恩最深難可報德也。從此三昧起者。入住出時皆是不思議法界。非如世間禪定。動寂相礙有退失間隙時也。

南麼 薩婆坦他藥帝嚩毘也 薩婆佩野微藥帝嚩 微濕縛目契弊 薩婆他 哈 欠 囉吃沙摩訶沫麗

薩婆怛他藥多奔呢也 備 入闍帝 訶訶 怛囉磔 怛囉磔 阿鉢囉底訶帝 莎訶

初句 歸命一切諸如來。

次句 能除一切諸障恐怖等。是歎如來一切大力大護之德。

又次句 歎無量法門。毘濕縛亦是巧義。所謂無量巧度門。即是法幢高峰觀三昧普門業用。今欲説此明妃故。先歸敬一切如來如是功德也。

次云薩婆他。是總指諸佛如是功德。欲合同入一字門故。

次有哈欠兩字。正是真言之體。亦名種子。以下諸句皆轉釋此二字門。訶字是因義。所謂大乘因者即是菩提心。以一切因本不生故。乃至離因緣故。名為淨菩提心。是成佛真因**正法幢旗**之種子。上加空點是入證義。所以轉聲云哈也。法是大空。上加點轉聲為欠。即是證此大空名為**般若佛母**。正是**明妃之義**。於此**虛空藏**中含養真因種子。即是**大護義也**。復次法字門。猶如虛空畢竟清淨無所有。即是**高峰觀**所知境界。訶字是善提幢亦是自在力。以此二字相應故。猶如**大將能破怨敵**。又訶字門是**菩提心寶**。與**法字門虛空藏和合**故。得成**巧色摩尼**。能滿一切希願。今此真言中闕此欠字。下文具有也。

次句云囉乞叉即擁護義。如人恐怖厄難若恃怙有力大人。或得高城深池之固。則泰然無慮。彼諸怨敵雖以種種方便。無若之何。行人亦爾。依倚菩提心王。以般若胎藏為城郭。猶如虛空不可破壞。即是轉釋前義也。

次句摩訶沫麗。翻云大力。訶字菩提心中。具足一切如來力。今與法字合故。離諸繫縛無復罣礙。如虛空中風自在旋轉。故名大力。又訶字自在力。與法字無量巧度門合故。猶如力士具足千種技能。是故眾人無能勝者。故名大力也。

第七句釋此大力所由。故云從一切如來功德生。言此大堅固力。本猶諸佛**金剛種性生**。又於無量劫以來。常以此訶字真因。具修法字萬德。一一皆如金剛不可破壞。今衆德已滿諸力悉備。復當以此法幢**高峰觀三昧**。大摧法界怨敵普護衆生。

次即發誠實語。所謂訶訶字也。訶是恐怖彼聲。所以重言之者。一摧外障一摧內障。復次外是煩惱障內是智障。若釋字門。如來以何法恐怖諸障耶。謂即以此訶字門也。下三昧畫即是具修萬行。上有大空點即是已成萬德。訶字即是**法幢旗三昧**。空點合故即是**高峰觀三昧**。訶字是一切如來種子者。上點是**明妃之母**。下畫是**胎分日增**。如是義故。適發聲時**魔軍散壞**也。

次云坦囉吒。是叱呵懾伏之義。如師子奮怒大吼時衆獸無不懾伏。亦重言者。是對根本煩惱隨煩惱。乃至對治一切煩惱。界內煩惱界外煩惱也。

末句云阿鉢囉吒訶謹。是無對無比力義。結持上文。以此因緣故。名為大力大護明妃也。

莎訶是警覺諸佛令作證明。亦是憶念持義。如前已釋。

ちなみに大力大護明妃の真言とは、

南麼 薩婆坦他藥帝 嚩 嚩 微濕縛目契弊 薩婆他 哈 欠

囉吃沙摩訶沫麗 薩婆坦他藥多奔呢也彌 入闍帝 訶 訶 但囉磔 但囉磔 阿鉢囉底訶帝 莎訶

Namaḥ sarva-tathāgatabhyaḥ sarva-bhaya-vigatabhyaḥ viśva-mukhebhyaḥ sarvathā hama khama rakṣa-mahāvale

sarva-tathāgata=pure nijate hūm hūm trāt trāt apranīhate svāhā. (偶然ウェブ上で発見したもののサンسكريット文、参考まで)

恐怖を除去しあらゆる法門に巧みな一切の如来たちに帰依します。すべからく、カム(唵、訶字)、キヤム(欠、佉字)。

擁護と大力よ、一切の如来たちの功德から生まれた者よ、フーム、フーム。トラット、トラット。摧滅しない者よ、成就あれ。

である。この大力大護明妃の真言の解説分に、宗祖大師が言う「擁護」「自在能破」「能満願」「大力」「恐怖」の五つがふくまれている。最後の「等観歡喜」は、『大日経疏』巻十に、

卍字の中に訶字有り。是れ歡喜の義なり。上に大空點有り。是れ三昧なり。下に三昧畫有り。

此ぼ中の、下の畫字も亦た三昧なり。二の三昧の中に行ずるなり。三世の諸佛は皆な

此の觀に同じくす。故に名等觀と名づくるなり。

とあり、宗祖大師の文はこれと同じで『大日経疏』の引用そのものである。ただし、『大日経疏』が「三昧」としているところを、宗祖大師は「三昧耶」として「等同・平等」を明確にしている。

この大力大護明妃の真言に先立つ長行からは、この真言が大悲胎藏（『大日経』）にもとづく利他行の意味であることが察せられる。すなわち、

その時、世尊は是くの如き念を作す。我れ、初發意従り以來、常に此の勇健の菩提心を以って、正法と及び衆生を護持す。無餘の衆生界の音聲を哀愍して、此の持明法句を説く。

謂わゆる、大悲胎藏の三昧なり。此の三昧は是れ一切の佛子の母なり。此の佛子とは、即ち是れ清淨法幢の菩提心なり。漸次増長し乃至誕じ、之を育つ。後、猶し固く心を勸じ、守護して之を乳養するが如し。是の故に、母の恩は最深にして報徳に報ずるべくんば難しと説くなり。

## ■あとがき

宗祖大師は、「吽字」の意義について、末尾近くで次のように言っている。この『吽字義』の結論とも読める。すなわち、

この「吽字」一字に、通底する諸経論の説く道理を内包することについてであるが、直言すれば、『大日経』『金剛頂経』が説く所は皆、この「菩提爲因・大悲爲根・方便爲究竟」の「三句の法門」を過ぎず、もし広大な教説を集約して簡略にし、枝葉末節を内包して根本の教理に戻したとしても、一切の教義はこの「三句の法門」を越えることはない。この「三句の法門」を束ねると、一つの「吽字」となる。

さらに、最後の「吽字」の総括で、「大力大護明妃」の真言をもとにした「擁護」「自在能破」「能満願」「大力」「恐怖」と、観自在菩薩の真言をもとにした「等観歡喜」を説く。いずれも衆生済度のテーマであり結果功德であり、『大日経』『住心品』の「菩提爲因・大悲爲根・方便爲究竟」であり、大悲胎藏の円満成就である。

すなわち、宗祖大師は『吽字義』によって、「吽字」一字に大悲利他行の結果功德がすべて摂持されていることを明かしたのである。なるほど、真言の最後に付けられる「フーム・うん」は、宗祖大師にとっては「擁護」「自在能破」「能満願」「大力」「恐怖」「等観歡喜」というニュアンスを含んだ聖音なのである。

この『吽字義』を読むにあたって、「原文」を「大正新脩大藏経テキストデータベース版」（大正No.2729）を依用した。しかし「汗字」が「汚字」になっているなどところどころ誤記があり、電子版「定本弘法大師全集」所収の「吽字義」を参照しながら、時に私なりに直した。

「原文」に続いて「書き下し」を付した。

「書き下し」に続いて「私訳」を付けた。私なりの現代語訳であるが、意識による誤訳を避けるためできるだけ原文に添って直訳した。

「私訳」のあとの「註記」は、専門語や難解な語の解説である。できるだけ正確を期したが調べ尽くせないものや長くなるので簡略にしたものもある。とても時間を費やしたがご参考になれば幸いである。

さらに、ご参考までに「付記」を付け私論を述べさせていただいた。

今回は、松長有慶博士の『訳注 咩字義』や、福田亮成先生の『現代語訳 咩字義』（ノンブル社）や、畏友の故松本照敬師の『咩字義考』（『成田山仏教研究所紀要』二十五）、そして小田慈舟博士『咩字義講説』（『十卷章講説』上巻）・那須政隆博士『咩字義』（『国訳一切経』諸宗部二十）などのお世話になった。とくに松長先生の『訳注 咩字義』には『大日経』その他の引用の典拠や伝統教学に関する註記に助けられた。記して学恩に心からの感謝をささげる次第である。

令和七年 如月

草学道人 長澤弘隆